

43323

教科書文庫

4
760
40-1924
01304
58327

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

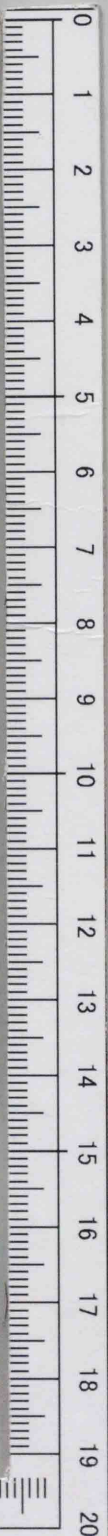


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
40-1924
01304

北村季晴編

中等音樂教科書

(種甲)

卷壹

弘樂社出版部發行



中央図書館

教科書文庫

4

760

40-1924

0130458327

中等音樂教科書

(種甲)

卷壹

北村季晴編



弘樂社出版部發行

広島大学図書

0130458327



緒言

世に樂典の書其類妙ならず。唱歌の集亦頗る多し。然かも如何にしてこの理論と實科との兩者を適當に鹽梅連絡せしめて、秩序系統ある實際的教程を作るべきかは、此の科の教授上最も緊要の問題なるにも係らず、未だ之に關して適當の良者無きは如何。音樂者並びに教育者は、この問題を重要視せざるか。將た其重要なるを知つて、なほ之を等閑に附しつゝあるか。

「音樂科は技術的感情的課程なれば、他の理智的科目の如く、組織的教授を爲し得べきにあらず。」との誤れる臆斷の下に、不秩序なる教授の踏襲せらるゝや久し矣。試みに諸學校に就て、此科の教授細目を視よ。多くは皆若干の歌曲が慢然排列せらるゝに過ぎずして、何等の組織系統あるを見ず。かくて今日甲の歌曲は教へられ、次の日乙の歌曲は授けられて、其間何等の連絡も理解も無くんば、如何てか此科の眞の効果は收め得べき。宜べなり、學生は其讀譜力不充分にして、音樂上の基礎的智識に乏しく、應用の能力亦缺くるを以て、世に出て、何等此の科の實際的效果の見るべきもの無き事や。此の如くにして此科は、今猶ほ教育上將た社會上、やゝもすれば輕視せられ、將た度外視せられつゝあるの傾きあり。慨歎に堪へざるなり。

抑も洋式音樂は、其組織の學理的秩序的なる點に於て、教育上有要なる一地步を占むるものなり。然るにこの組織的なる洋式音樂が、我が教育上、然かく不秩序に取扱はれつゝあるは、頗る矛盾せる現象ならずや。而して余輩は、其然る所以が、前述の如く、理論と實科と相俟ち相應じて、歩々組織的教授を行ふに適すべき、綜合的教科書無きに因ること大なりと信ずるものなり。余輩はこの目的に適ふべき良書の編纂は、極めて至難の事業にして、到底余等淺學のよく之を完成し得べきに非ざることを知ると雖も、然かも不肯自ら量らず、たとへ尺寸たりとも、この樂界の一大缺陷を補はんことを希圖し、即ち歐米に於るこの種の書籍を涉獵參考し、先輩後進の意見と經驗とに聽き、作曲者作歌者の大なる助力に俟ち、夙夜腐心推敲の結果、前後十年の星霜を閲して、僅にこの篇を輯綴することを得たり。この書固より未だ完璧を期すべしに非ずと雖、庶幾くは以上記の缺陷に對する、應急の要を充たすに足り、又將來這般の書を編まん人の爲に、幾分の參考と成るを得ば、讀者が望外の光榮なり。本書中不備の點に關しては、追次之が訂正を期す。讀者幸に垂教を惜む勿れ。

本書從來緒言を缺く、茲に大正九年三月、原版改修に際し、初刊當時の舊稿を求めて、以下の二表及凡例と共に追補す。

表計統其に並・名者歌作曲作・目的・容内の曲歌るせ當配に卷一第 [表一第]

Table of course content for the first semester, including lesson titles like '花の道' and '心衣', and detailed musical notation with lyrics. Includes a sidebar with '此等拾曲' and '歌曲類別'.

(衣定概割間時期學)例一の目細授教考参・用(年學一第)一の卷書本 [表二第]

Table of course content for the first year, organized by semester (第一學期, 第二學期, 第三學期) and lesson number (第一教, 第二教, etc.). Includes lesson objectives and time allocations.

凡例 (教授者へ)

- 一、本書は師範學校、中學校、高等女學校等 中等程度の學校の音樂教科用書に充てんが爲編したるものなり。
- 二、前頁に掲げたる二様の表中、第一表は、参考として、本書所載の教材を各學期の時間に配當し、其連絡、進度、成績等の様を指示したるものなるが、諸學校に於ける該科の状況及授業時數等 固より一概ならざるを以て、教授者は適宜之を取捨斟酌せられんことを望む。この表は四卷を合せて一應通覽参照せられ度し。
- 三、本表の授業時數は、每學期の始より、其期の末月の十日まで(爾後を試験期と見做し)の日數中より、祝日其他の休業日として、每學期二週(四時間)を控除し、之を以て實際の授業時數と假定したるものなり。(週割と月割とは空欄を存して記入に備ふ。)
- 四、樂典は、從來の如く、別冊によりて抽象的に講義する時は、頗る難解のものとなり、且つ歌曲と密接連次の連絡を保ち難し。本書は樂典の各項目を適宜に小分けし、次に掲げたる歌曲に於て、直ちに之を應用實行する方法を採れり。即ち理論は各々實科の豫備又は説明となり、歌曲は理論の應用と成りつゝ、趣味と理解と兩々相俟ちて、漸次易より難に進むの組織によるものなり。されば若し所載以外の歌曲を取入るゝ場合には、其前後の連絡關係を考慮し、適當の場所へ之を挿まれんことを望む。
- 五、本書各學期間教材の分量は、最多限を含むものにして、これは學校の情況により、取捨に便せんが爲なり。(殊に一理論科に對する應用例曲は、常に二曲以上を掲げれば、適宜選擇する事を得べし。)
- 六、本書中理論科は、一卷二卷に於て歩々小分して説きたる所を、三卷以下に於て綜合補修し、唱歌科は、二卷は單音、三卷以下、輪唱、二重、三重唱と進み、四卷の末に少許の四重唱(單性)を載せたり。(重音式唱歌は、或は其メロデーのみを取り、單音として授くるを得。)
- 七、本書は主として、理論と實科との秩序ある連絡を計りたるものなれども、然かもまた一面、該科の本來の目的たる、趣味の涵養に資すべき良歌曲の撰擇に付ては、更らに一層の考究を費したり。其他「實施的綜合教授書」としての諸種の要項(例令ば總備及復習の方法、基本教練の應用、歌曲上諸種の趣味の序次、配當、分量、邦人の作曲と洋曲との配當、分量、歌章と季節との關係等)に付ても、編纂上夫々細心の注意を拂ひたるものにして、在來の唱歌集の如く、漫然歌曲を蒐集したるものとは、全く其撰を異にするものなり。(前頁第二表参照)
- 八、本書は教授の順序上、當初より音名、調名及調號を説かず。先づ諸種の調の階名の讀み方に熟せしめ、第二卷に入りて、初めて諸調音階構成法を説けり。必しもハ調を先きにするは唱歌上無意味なればなり(學生がハ調は讀み易く、イ調ハ調等は難しと成すは從來教授上の缺點なり)。
- 九、高低の八音に對する、音名の區別法は、從來數字譜(略譜)の夫れと混同して、誤まれる者多し。本書には之を訂正したり。大字音、小字音は、歐字のA B C と a b c とに相當せしめたる名なり。(本書第二卷十一頁及第三卷十九頁参照)
- 一〇、上記以外の事は追て教採用参考書を編して、之に詳記せんことを期す。(本書第二卷十一頁及第三卷十九頁参照)
- 一一、本書別に同名の乙種本(文部省検定済)あり。即ち或る種の學校に於ける、本書の生徒用本なり、
- 一二、本書中の歌曲は、前記文部省検定済のものと同じなるものとす。
- 一三、【附註】 本書中の歌曲は、大正九年三月改刷の際、之を前記檢定済のものと同じに訂正したり。されば其以前のもの(共益商社書店發行)と本書とは、主として歌詞に於て多少の相異なるものとす。

中等音樂教科書卷の目次



第一學期

唱歌學習者心得……………頁

第一教 音符……………七

樂譜……………音符の種類……………普通音符……………普通音符の歷時練習……………附點音符……………附點音符の歷時練習……………

第二教 休止符……………一二

休止符……………休止符の歷時練習……………問題……………

第三教 音階の一……………一五

〔豫習簡條〕……………音階……………全音及半音……………長音階……………階名……………階名豫備練習……………

第四教 譜表の一……………一八

譜表……………譜表上の音階並に其階名……………階名讀み方練習……………問題……………

〔練習曲〕Do Re 練習曲(三)反奏點……………Do Re Mi 練習曲(四)……………Do Re Mi

目次……………一

Sol 練習曲(四)…………… Do Re Mi Sol La 練習曲(四)連結…………… Do Re Mi Sol La Do 練習曲(五)…………… Mi Fa 練習曲(四)

歌曲

心の衣……………三二

Si Do 練習曲(四)……………長音階練習曲(六)延長

歌曲

朝(帶)……………三六

田家……………三八

第五教 譜表の二……………四〇

[豫習箇條]…加線……………問題…………… Do Re Mi Fa Sol La Si Do Re Mi 練習曲(四)

歌曲

天兵無敵……………四三

第二學期

Sol La Si Do 練習曲(三)

歌曲

秋 曉……………四六

秋の樂み……………四八

第六教 發聲基本練習の一……………五〇

基本練習…氣息用法…緩吸緩呼法…緩吸急呼法…急吸緩呼法…

急吸急呼法……………樂曲上に於ける吸息……………氣息用法應用練習

歌曲

運動會……………五四

第七教 發聲基本練習の二……………五七

(發聲機關の圖)……………聲區……………聲區適用法……………地聲……………上聲……………裏聲

…聲區適用法練習(女子用及男子用)……………聲區の調和……………同練習…發音上の禁則

歌曲

四季の散歩……………(圓點、橫線)……………六四

第八教 發聲基本練習の三……………六六

目次

發韻法……………母韻と子音……………母韻の發聲法……………了韻……………工韻……………イ韻……………オ韻……………ウ韻……………(母韻の口形圖解)……………發韻練習曲

歌曲

集會……………七二

第九教 拍子の一……………七四

〔豫習箇條〕……………拍子……………強聲部及弱聲部……………小節……………縦線……………

復縦線……………拍子記號……………二拍子……………二拍子の種類……………四分の二

拍子……………二分の二拍子……………〔問題〕

歌曲

めぐる車……………七八

聖壽無量……………八〇

太平の曲……………八二

第十教 拍子の二……………八四

〔豫習箇條〕……………四拍子……………四拍子の種類……………四分の四拍子……………

八分の四拍子……………〔問題〕

歌曲

師の恩……………八六

凱旋……………八八

第三學期

第十一教 音程の一……………九〇

〔豫習箇條〕……………音程……………一度音程……………二度音程……………三度音程……………

二度音程練習曲……………三度音程練習曲

歌曲

冬興……………九六

第十二教 發想の一……………九八

〔豫習箇條〕……………發想法……………強弱記號……………強弱記號練習

歌曲

三種の神器……………一〇二

教訓の歌……………一〇四

目次

第十三教 變化記號

變化記號……………變化記號の種類……………嬰……………變……………本位記號……………一〇六

歌曲

進軍……………一〇八

歸雁……………一一〇

民の務……………一一三

以上

中等音樂教科書卷の一目次終

中等音樂教科書卷の一

北村季晴編

唱歌學習者心得十則

唱歌は何人
にても學び
得べし

聲の用ゐ方
を修練せよ

一、世には、殊に優れて善き聲を持てる者ならでは、唱歌科は修め得られぬが如く心得居るものあれども、それは誤りなり。専門の唱歌者と成らんとする者にこそ、格別の美しき聲をも要すれ、普通教育に於ける唱歌科は、普通の聲音と聽力とを有するものならんには、何人にも學び得べき課程なりと知るべし。

二、されども、唱歌を組織する所の第一の材料は、即ち人

唱歌學習者心得

の聲音に外ならざるが故に、正しき唱歌を組織すべき材料は、また正しき聲音ならざるべからざるや明かなり。而して人の聲音は、適當なる修練を経る時は、漸次相當の程度までは、之を精練し、淳化し得べきものなれば、學習者は、常によく注意して聲の用る方を學び、其發聲上の誤りを正し、且つ怠らず聲音を練磨して、之をして健全純美ならしめん事を努むべきなり。(第六教乃至第八教参照)

三、唱歌科を修むる者が、聲音の練磨に努むべきは勿論なれども、之と同時に學習者は、其聽官の修練が、また極めて重要なことを記憶せざるべからず。吾人は聲を以て唱歌すと雖も、その聲の善惡を識別し、また

善く歌はんとする者は善く聽くを要す。

之を律して其高低長短等を誤らざらしめんが爲の、審判者とも指揮者とも成るべきものは、即ち聽官なればなり。音聲如何に美なりとも、もし之を支配し之を律すべき聽官にして鈍ければ、終に完美なる唱歌は望み難かるべし。されば學習者は、常に教師の模範唱奏に傾聽すべきは勿論、又よく自ら己の唱謠の正しきや否やを聽き別け、なほまた特にこれが爲に設けられたる諸種の練習課(音程練習等)に勵み、勉めて此の機能の發達を促さん事を計るべし。

四、唱歌科には聲音及び聽官の練磨の外、なほ視官に關する修練を要するものあり、讀譜即ちこれなり。(讀譜は樂譜を視て之を奏唱するの義にして、これまた聽官の支配を受くること勿論なり)音樂に於ける樂譜

樂譜視唱のことに練熟すべし。

は、恰も他の學科に於ける文字に等しく、斯の道に入らんとする者は、先づこれを讀む事を習ふの要あり。即ち學習者は、たゞに聽き覺えの方法にのみよることなく、先づ樂譜の組織を學びて、之を讀む事に練熟し、進みては、記載されたる樂譜を視て、よく其意味を會得し、また誤りなく之を視唱し得るに至らん事を期すべし。

唱歌者の姿勢其他雜件

五、唱歌者の姿勢は、胸廓を充分に開き、兩手を垂れて直立すべし。

但場合によりては座唱するも妨げなし。

六、衣服の緊縛は、自然に胸廓を狭ばめ、吸入する空氣の分量を減少するを以て之を避くべし。

七、唱歌する際には、可成其容貌の爽快溫雅なるを要し、口形は微笑する時の如くなるべし。猶また高音を發するに頭を上げ、低音を發するに頭を下げ、或は首、足などを動かして、歌曲の抑揚と一致せしむる等のことあるべからず。

但拍子の正確を保たんが爲、外股を軽く打ちて、其拍數を計ふるが如きは妨げなし。

八、音聲の勢力は、徒らに之を強張することなく、可成爽朗婉美ならしむるを要す。是れ發聲上最も注意すべき要點の一にして、唱歌者の常に忘るべからざる所なり。(第八教聲區適用法の條參照)

九、發音の練習には、常によく其口形及び舌の位置等に

注意すべし。時々鏡を用ゐて、其形状位置を定むるを可とす。又唱歌する際に、書籍等を以て口を覆ふことあるべからず。

十、變聲期に相當せるものは、一時唱歌の練習を中止するを以て最も安全なりとす。されども女子にありては、殆ど之を感じざるものもあれば、唱者の咽喉に刺戟を覚えざる限り、靜和に發聲するは妨げなしと知るべし。






第一教 音符

樂譜 種々なる記號を設けて、音樂を書き表はしたるものを樂譜と云ふ。

音符 凡そ音樂に用ゐらるゝ音には、其歴時（とき）の長きものと短きものとの別あり。この區別を表はす所の記號を音符と名く。

音符の種類 音符には、普通音符と附點音符とあり。

普通音符 通常用ゐる所の普通音符は左の五種なり。

- (1)  全音符
- (2)  二分音符(又ハ半音符)
- (3)  四分音符
- (4)  八分音符
- (5)  十六分音符

普通音符の歴時練習

第一教 普通音符の歴時練習

【注意】 此の練習を行ふには、各自に掌を打ちて拍子を計ふるを可とす。但し全音符一個を四拍の割合に計ふべし。

∨ この記號は吸息すべき個所を示せり。

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

九

第一

第二

音符の圓形なる部分を符頭と云ひ、其縦線を符尾と云ふ。符尾の方向は、便宜其上下何れに向けても記すことあり(第二圖)

八分音符及び十六分音符の符尾に附きたる小斜線を鈎と云ふ。鈎は便宜上其二個若くは數個を連結して記すことあり(第二圖)

第一教 音符

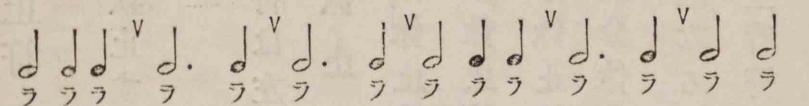
八

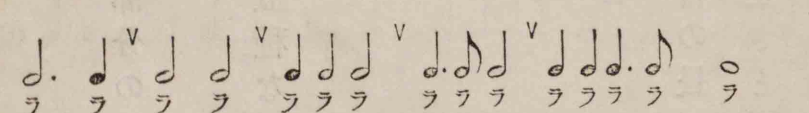
全音符、二分音符、四分音符等の名稱は、各音符が表はす所の音長の割合を示せるものにして、之を計るには拍數を以てするを常とす。

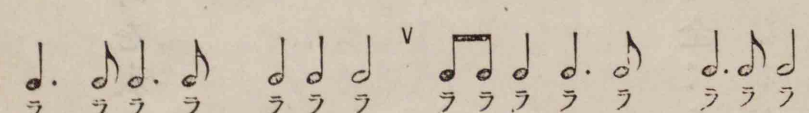
即ち最も普通には、四分音符一個を一拍と定め、二分音符は二拍、全音符は四拍、また八分音符は半拍、(即ち二個)十六分音符は四分の一拍(即ち一個)の割合となす。(第一圖)

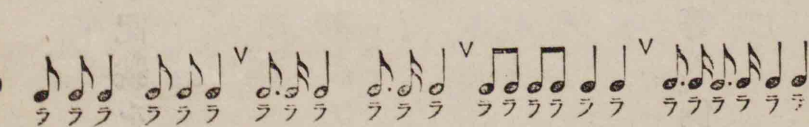
附點音符の歷時練習

〔注意〕 この練習もまた掌を拍ちて拍子を計ぶること、前の如くするを可とす全音符を四拍の割合とすることまた同じ。




(1) 

(2) 

(3) 

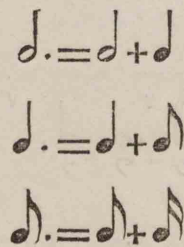
(4) 

附點音符 通常用ゐる所の附點音符を左の三種とす。

- (1)  附點二分音符
- (2)  附點四分音符
- (3)  附點八分音符

附點音符の長さは、普通音符に其二分の一の音長を加へたるものと同一なり。例令ば附點二分音符の長さは、二分音符一個の長さに、四分音符一個の長さを加へたるものと同一なるが如し。(第三圖)

第三圖



第二教 休止符

休止符 樂曲中、聲音を黙止する部分の歴時ながさを表はす記號を、名けて休止符と云ふ。

通常用ゐる所の休止符は左の五種なり。

- (1) 全休止符
- (2) 二分休止符
- (3) 四分休止符
- (4) 八分休止符
- (5) 十六分休止符

各休止符の長さは、同名なる音符の長さと全くあひ等し。例令へば全休止符の長さは、全音符の長さと同一なるが如し。

休止符の歴時練習

〔注意〕 拍數の計へ方は前課に同じ。

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

問題

- 一、音符の種類を記せ。
- 二、休止符の種類を記せ。
- 三、三個、五個又は六個の音符を以て、全音符一個に相當するものを記せ。
- 四、全音符を四拍に計ふる時は、二拍、一拍半、及び三拍到相當する音符各々如何。
- 五、全音符を四拍到計ふる時は、附點二分音符、四分音符及び八分音符の拍數各々如何。

第三教 音階の一

〔豫習箇條〕

〔設問〕 音の長短は如何にして表示せらるゝぞ。

〔説示〕 音には長きと短きとの差異の外に、低きものと高きものと區別あり。

音階 低きより高きに、若くは高きより低きに、或る形式によりて、順次に排列せる所の音の階段を、名けて**音階**といふ。

全音及び半音 音階中、相隣接せる各二個音の距離には、廣きものと狭きものと別あり。而して其廣きものを**全音**と云ひ、狭きものを**半音**と云ふ。

長音階 八個の音の階段にして、其第一音より上方に計へて、第三音と第四音との間、及び第七音と第八音との間に半音を存して、他は悉く全音なるものを**長音階**と稱ふ。(第四圖)

階名豫備練習

(注意)

下の練習を行ふ場合には、音階の圖(第五圖)を書き、教師の範唱に擬しつゝ、之を視唱するを可しとす。

(一) 二分音符(二拍)の長さを以て、下の階名を唱ふることを練習せよ。

- a. $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Do}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Do}}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Do}$.
- b. $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Mi}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Mi}}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Do}$.
- c. $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Re}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Re}}$ $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Do}$.

(二) 四分音符(一拍)の長さを以て、下の階名を唱ふることを練習せよ。

- a. $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Re}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Mi}}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Do}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Do}}$
 $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Re}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Do}}$ $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Do}$.
- b. $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Re}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Re}}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Mi}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Mi}}$
 $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Mi}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Re}}$ $\underset{f-}{Re}$ $\underset{f-}{Do}$.

(三) 二分音符(二拍)の長さを以て、下の階名を唱ふることを練習すべし。

- $\underset{f-}{Do}$ $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Sol}$, $\overset{v}{\underset{f-}{Sol}}$ $\underset{f-}{Mi}$ $\underset{f-}{Do}$.

第六圖

ものなりと知るべし(第六圖)
 長音階の八音は、更に其上にも下にも、同様なる音列の連続せる

第五圖

階名

(第五圖)

即ち Mi と Fa との間、及び Si と Do との間は半音にして、他は悉く全音なり。

る名稱を有す、之を階名と云ふ。

第四圖

階名 長音階は其各階

段に、 Do Re Mi Fa Sol La Si Do な

第四教 譜表の一

譜表 音の高低を表示するには、五條の平行横線を畫きて、其線上及び線間に音符を排記するものとす。此五線を名けて**譜表**と云

ふ。(第七圖)

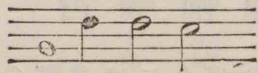
譜表上、音符の位置の高きものは高音を表はし、其低きは低音を示すものとす。

譜表の線及び間は、下より上に數へて、順次に第一線、第一間、第二線、第二間等と呼び、また其各線及び各間を一度と稱ふ。(第八圖)

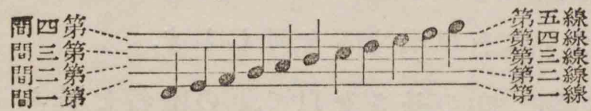
されば譜表は、五線四間より成りて、九度を有し、更に其上最下に各一音づつを記載し得るを以て總計十一個の音を區別し得るものなり。(第八圖)

〔設問〕 一、高低の音の順次に連接せる階段を何と云ふや、
二、長音階とは如何、又階名とは如何。

第七圖



第八圖



譜表上の音階竝に其階名 音階は、譜表上何れの位置(線^上若くは間)よりも之を始むる事を得べし。今茲に譜表上種々の位置より始めたる、長音階の音列と其階名とを示さん。(第九圖)

樂曲には、其調子の高きものも低きものもあり、故に其高低に應じて、音階は譜表上其第一音の位置を異にすべく、從て階名も亦推移すべし。學習者は、何處を Do^r とすれば、

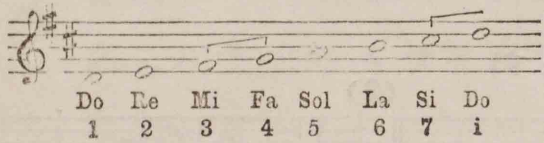
何處が Re^r となり、何處が Mi^r となる等を、容易く讀み分くる事に熟練するを要す。
なほ何處を Do^r とするとも、Mi^r との間に、及び Si^r と Do^r との間は、常に半音なるべきことを記憶すべし。

第九圖

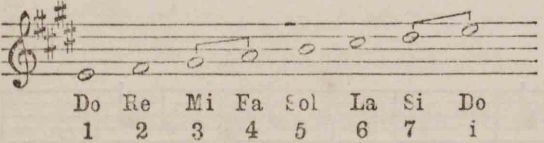
〔圖中の弧線(一)は半音の位置を示せり。譜表の首部にある記號(♯)の事は後章に明かなり。〕

第四教 譜表上の階名

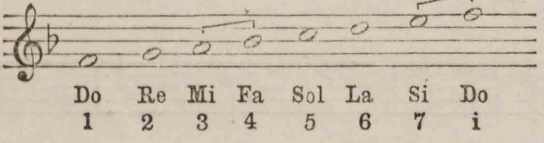
(一) (第一線の下を第一音(D^o))とせる例



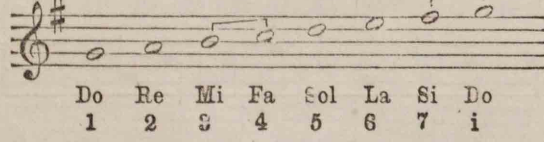
(二) (第一線を第一音とせる例)



(三) (第一間を第一音とせる例)

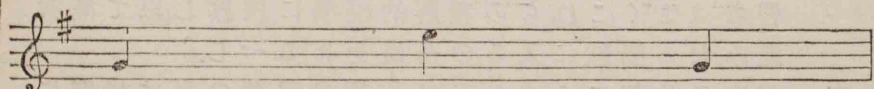


(四) (第二線を第一音とせる例)



問題

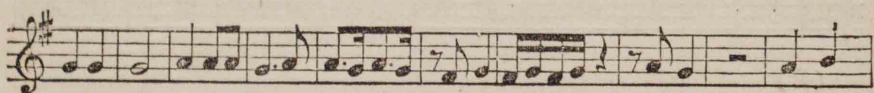
(一) 譜表の第二線をDoと定めて、下の各階名に相当するものを四分音符にて書き表はすべし。



Do Mi Fa Re Sol Do La Mi Si Fa Re Do Mi Sol

なほ此の他に、譜表の第一間及び第一線の下の音をDoとしたるものをも書き表はすべし。

(二) 下の楽譜を寫記する事を練習せよ。

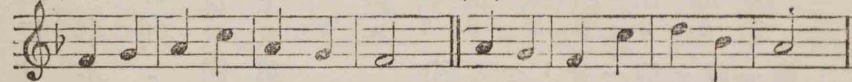


階名讀み方練習

下の楽譜に就き、各音の階名を述べよ。

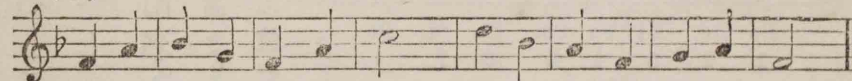
(第一間をDoとす)

(1) (2)

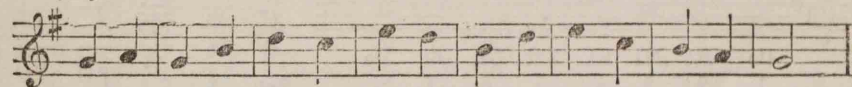


(同上)

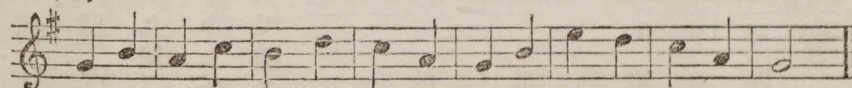
(3)



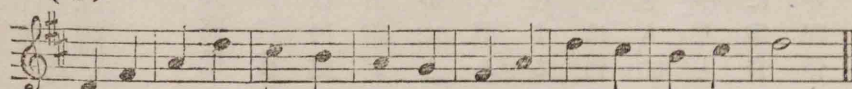
(1) (第二線をDoとす)



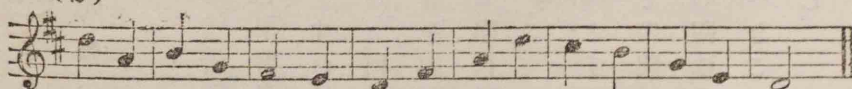
(2) (同上)



(1) (第一線の下をDoとす)



(2) (同上)



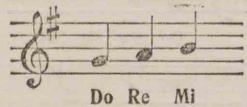
第二練習曲

(Do. Re. Mi 練習)

(設問) 四分音符一個の長さは十六分音符幾個に相當するや

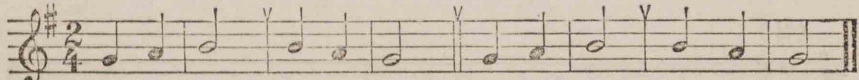
第四教
練習曲 (Do. Re. Mi)

(第二線をDoとす)

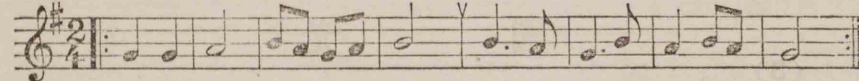


Do Re Mi

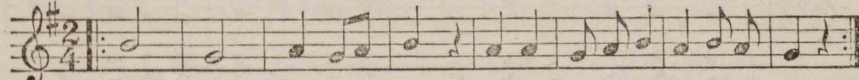
(1)



(2)

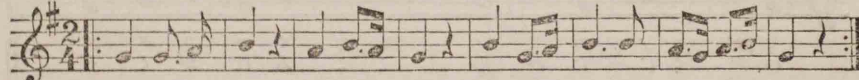


(3)



ハ ナ ソ ラー ヒク テッー ネ ム ル ハ ル ノ ヒ
つ き き よー く かぜ そ よ ぐ な つ の よ

(4)



イ ザ イ ザ ス スー メ マ ナー ビ ノ ミー チー ナ
た か れ の は なー を た をー ら む まー でー は

高嶺の花を 手折らむ までは	い (4) すざく すゝめ 学びの道を。	月清く 風そよぐ 夏の夜。	花 (3) 蝶笑ひ ねむる 春の日。
----------------------	-------------------------------	---------------------	-----------------------------

三三

練習曲

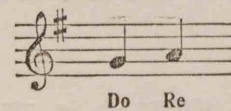
(注意)

- 一 以下數頁に渉る練習曲は、實に樂譜視唱法の入門にして、實習上追次に諸音高低の關係を覺り、長短音符の拍子に慣れ、曲節の趣きを會得し、又諸調階名の讀み方にも、熟せしめんが爲に設けられたるものなり。なほ毎練習に、一二の應用小歌曲をも添へたれば、學習者はよくこれらの理解的視唱に練熟し、以て漸次進みたる唱歌に入るの基礎を作るべし。
- 二 譜表の首部にある $\frac{2}{4}$ 又は $\frac{4}{4}$ 等の記號の事は、後章に明かなり。

第一練習曲

(Do. Re 練習)

(第二線をDoとす)

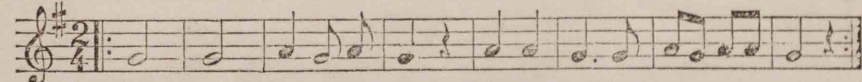


Do Re

(1)

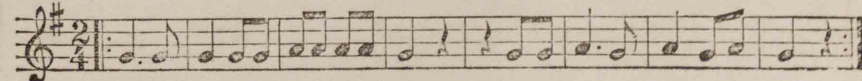


(2)



(説示) ||: || これは反變點と稱へ、此間の部分を反覆して歌ふべきを示せるものなり。

(3)



第四教
練習曲 (Do. Re)

三三

第三練習曲(つゝき)

田 植

(第一間をDoとす)

(4)

ミ ネー ニ コー サ メ ノ ク モ ハ レ テ
 な がー さ かー た む け な と め ら が

ヤ マ モ ト キー ヨー キ ュ フー カ セ ニ
 う た ふ も なー かー し た うー ゑ う た

〔説示〕 これは連結 (slur) と稱へ、この弧線内の音は滑かに歌ふべきことを示せる記號なり。

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol)

(4) 田 植

峰に小雨の
 雲晴れて、
 山もと清き
 夕風に、
 小笠かたむけ
 少女らが、
 謠ふをかし
 田植うた。

第三練習曲

(Do. Re. Mi. Sol 練習)

(第一間をDoとす)

Do Re Mi Sol

(1)

(2)

國 光

(3)

フヨウノミネニカガヤクアサーヒ
 ふきうのうみにかさしづるひかーげ

ワガヒノモトノヒカリハカクゾ
 わがくにたみのひこりるはかくぞ

(3) 國 光

芙蓉の峰に
 かやく朝日、
 わが日の本の
 光りはかくぞ。
 扶桑の海に
 さし出る日影
 わが國民の
 こころはかくぞ。

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol)

第四練習曲(ついき)

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol La)

あすこそ日曜

(第一間を Do とす)

(4)

ア ス コ ソ ニ チー エ ウ モ シ ソ ラ ハ ソー ナ バ
 も し あ め ふ リー な ば と も だ ち つ どー へ て
 ハ ル ル モ ク モー ル モ ア ス コ ソ ニ チー エ ウ

ト モ ト ウ チー ツー レ ノー ベー ニ ヤ アー ソー バン
 し や う か を うー たー ひ おー るー が ん ひー かー ん
 マ ナ ビ ノ トー モー ト ター ノー シ ク アー ソー バン

(4)

あすこそ日曜
 もし空晴れなば、
 友とうちつれ
 野邊にや遊ばむ。
 もし雨ふりなば
 友達つどへて、
 唱歌を歌ひ
 オルガンひかむ。
 晴るゝも曇るも
 あすこそ日曜、
 まなびのともと
 楽しくあそばん。

第四練習曲

(Do Re Mi Sol La 練習)

(第一間を Do とす)

Do Re Mi Sol La

(1)

立 志

(2)

ヒ ト タ ビ コ コ ニ タ テ ツ ル コ コ ロ
 ば ん な ん み ち な さ へ ぎ る と て も

ヒ ャ グ セ ル ツ セ マ デ ザ イ カ テ タ ユ マ ム
 た ふ る る ま で ば つ と め て や ま じ

同 上

(設問) この練習と上記のものとの差別如何。

(3)

ヒ ト タ ビ コ コ ニ タ テ ツ ル コ コ ロ ヒ ャ グ セ ル ツ セ マ デ ザ イ カ テ タ ユ マ ム
 ば ん な ん み ち な さ へ ぎ る と て も た ふ る る ま で ば つ と め て や ま じ

(2) 立志
 (3) 立志

一度こゝに
 立てつる志
 百折千挫
 いかでたゆまむ。

萬難道を
 さへぎるとても、
 倒るゝまでは
 つとめてやまじ。

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol La)

第五練習曲(つゞき)

残 花

(第一線の下をDoとす)

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol La Do)

(4)

アーラバノモリーニヒトリノコルヤヘノサク
 ラーノスーガタアハレトーホヤマデラーノク
 レノカネーニチーラチラヒラヒラサビシクテル

(4) 残 花

青葉の杜に
 獨りのころ、
 八重の櫻の姿あはれ、

遠山寺の
 暮れの鐘に、
 ちらくひらく
 さびしく散る、

第五練習曲

(Do. Re. Mi. Sol. La. Do 練習)

(第一線の下をDoとす)

Do Re Mi Sol La Do

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol La Do)

(1)

(2)

初 夏

(3)

ミユルカギリミナクコレ
 ながれきよくふなくかぜ
 ミドリンワカバシナツコハキヤ
 はどへにすず

(3) 初夏

見ゆる限り、
 みなこれ
 緑の若葉。
 夏は来ぬ。

流れ清く、
 吹く風
 膚にすずし。
 こゝちよや。

第六練習曲

(Mi Fa 練習)

〔設問〕 長音階の音列中に於ける半音の位置を問ふ。

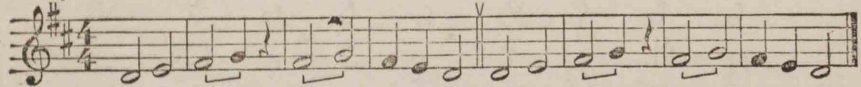
〔注意〕 以下の練習曲には是迄用ゐざりし半音を加へたり、半音は初學者の頗る困難を感じるものなれば、特に意を用ゐて、其練熟を計るべし。
 ㄣは即ち半音の位置を示せり。

(第一線の下を Do とす)

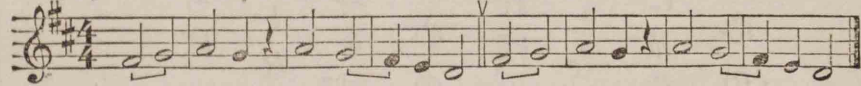


Mi Fa

(1)



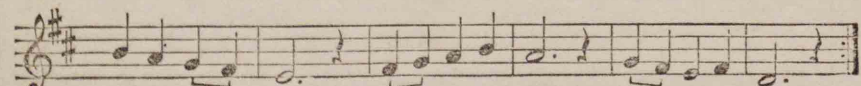
(2)



(3)



(4)



第四教 練習曲 (Mi Fa)

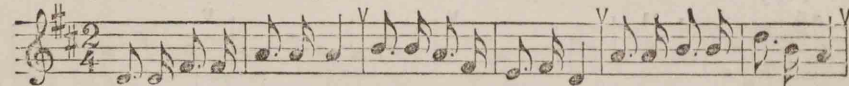
三二

第五練習曲(つゞき)

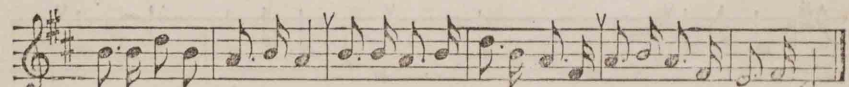
一日の業

(第一線の下を Do とす)

(5)



ヒトヒノ ヲザモ イマナシ ナヘヌ イザイザ イモト
 がくわの よしよ- いましも はてぬ いざいざ おとと



イザコヨ トモヨ ココロモノドカニアソバムトモニ
 いざこよ ともよ ころものどかにあそばむともに

第四教 練習曲 (Do Re Mi Sol La Do)

三〇

(5)

一日の業

一日の業も

今なし終へぬ、

いざこよ妹

いざこよ友よ、

心ものどかに

遊ばむ共に。

學課の豫習

今しも果てぬ、

いざこよ弟

いざこよ友よ、

心ものどかに

遊ばむともに。

心の衣

〔設問〕 一、音符と音符とに渡れる弧線(—)は、何と云ふ記號にて、何の用を爲すものぞ。

二、當曲中半音の位置を問ふ。

第四教

歌曲(心の衣)

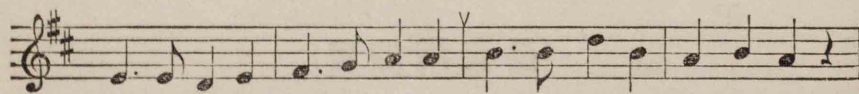
溫和に ♩ = 116. (第一線の下を Do とす)



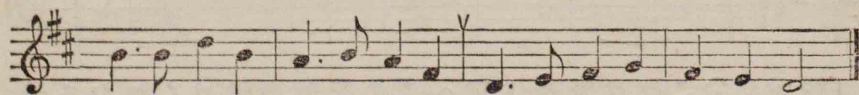
一、シロキイトサヘアカキニソメバ
二、ほそきいとさへはたちにおれば



ハナヲアザムクキヌートナール
にぢーはつしくきぬーとーなる



ワレラモコノミヲマコトニソメテ
われらもこのみにまことをこめて



オラバヤココロノタダシキキヌヲ
おらばやこころのただしききぬを

三三

第四教 歌曲(心の衣)

心の衣

一、白き糸さへ赤きに染めば、

花をあざむく衣となる。

われらもこの身を誠意に染めて、

織らばや心の正しき衣を。

二、細き糸さへ集めて織れば、

ものさまの衣となる。

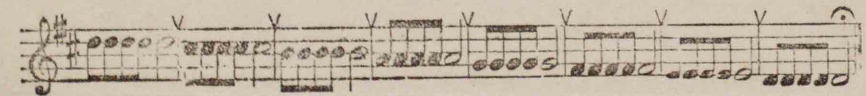
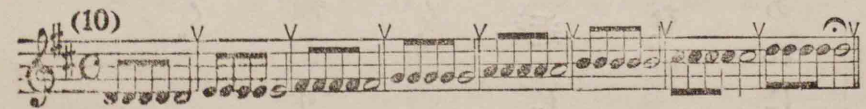
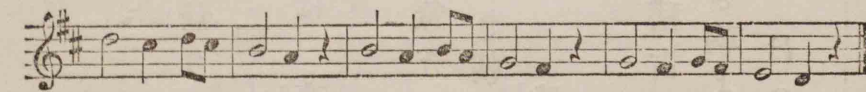
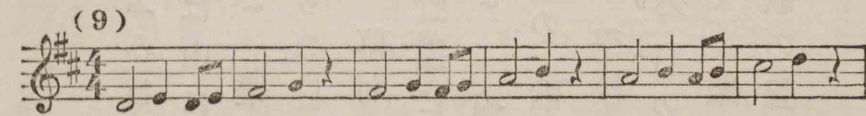
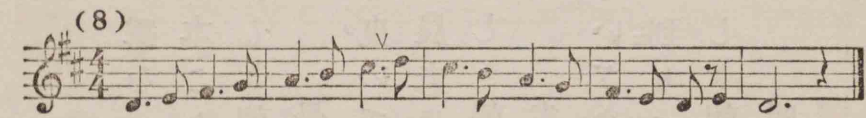
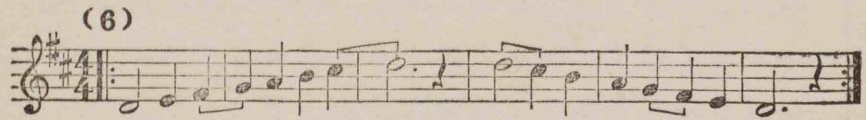
われらも此身に誠意を籠めて、

織らばや心の正しき衣を。

三三

第七練習曲(長音階練習)(つゞき)

第四教
長音階練習曲

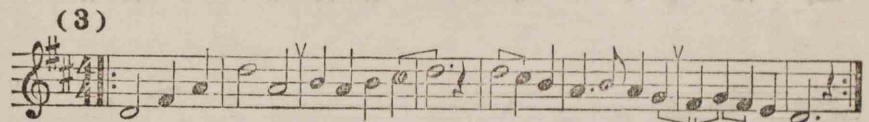
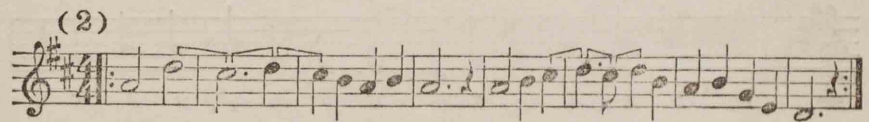
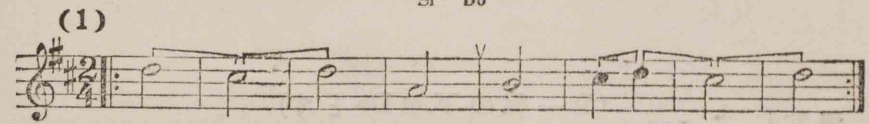


三五

第七練習曲

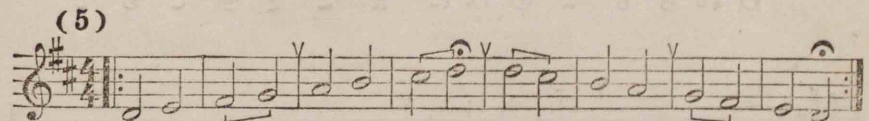
(Si Do 練習)

(第一線の下をDoとす)



(長音階練習)

(設問) 長音階とは如何.



〔説示〕 ♪これは延長と稱へ、この記號の附けられたる音符は、特に其長さを延長すべきものなることを示せり。

第四教
練習曲(Si Do)

三四

朝

一、草葉の露を ふみわけて、

木こりは山に 登り行く、

うれしき朝よ 樂しき朝よ、

曇らぬ日影は 高嶺より。

二、小牛を曳いて 草刈に、

農夫は野邊に 急ぎ行く、

うれしき朝よ 樂しき朝よ、

雀の歌は 遠近に。

三、我等もいざや 學校に

到りて今日の 稽古せむ、

うれしき朝よ 樂しき朝よ、

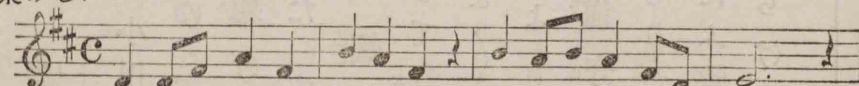
唱歌の聲は はやあれに。

朝

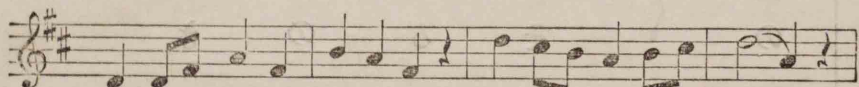
(説示) 同度の二音間に涉れる弧線を帶といひ、二符の音長を結合し之を一個と見做して歌ふべきを示すものなり。(當曲の末段*に於ける帶は、歌詞第二章及び第三章に於て其效用をなす。)

(第一線の下をDoとす)

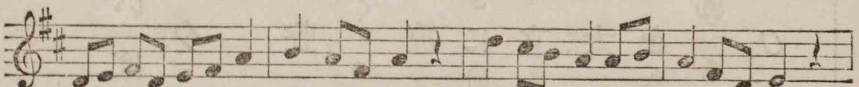
樂げしに ♩=120.



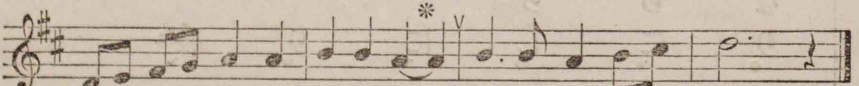
一、ク サ ー バ ノ ツ ユ チ フ ミ ー ア ケ ー テ
二、こ う ー し を ひ い て く さ ー か り ー に
三、ロ レ ー ラ モ イ ザ ヤ ガ ー ツ コ ー ー ニ



キ コ ー リ ハ ヤ マ ニ ノ ホ ー リ ユ ー ク ー
の ー ー ふ は の ベ に い そ ー き ゆ ー く ー
イ タ ー リ テ ケ フ ノ ケ イ ー コ セ ー ン ー



ウ ー レ ー シ ー キ ア サ ー ヨ タ ノ ー シ キ ー ア サ ー ヨ
う ー れ ー し ー き あ さ ー よ た の ー し き ー あ さ ー よ
ウ ー レ ー シ ー キ ア サ ー ヨ タ ノ ー シ キ ー ア サ ー ヨ



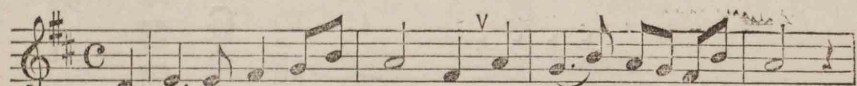
ク ー モ ー ラ × ヒ カ ゲ ハ タ カ 子 ヨ ー リ
す ー す ー め の こ ぶ は ー を ち こ ち ー に
シ ー ー ー カ ノ コ エ ハ ー ハ ヤ ア レ ー ニ

田 家

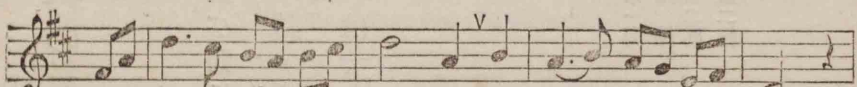
(第一線の下をDoとす)

第四教 歌曲(田家)

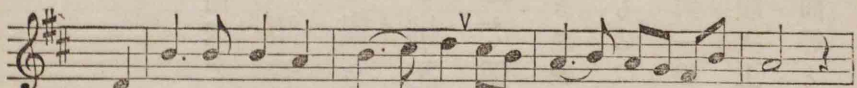
流暢に ♩ = 116.



一. セ ド ノ ナ ガー ハ ノ ハ ナー イー バー ラ
 二. う ら の は たー け の ま くー わー うー リ
 三. ム ラ ノ チ ンー ジュ ノ フ エー ター イー コ

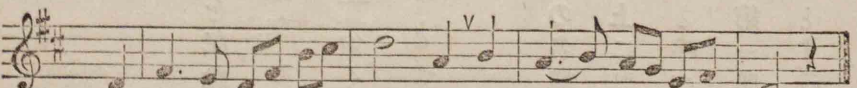


ニー ホ ヒ ユー カー シ キ ユ フー ズー グー ヨに
 きー り て たー うー ベ る す すー しー さー ニ
 ター ラ リ トー トー ナ チー コー チー ニ



モ ロ コ エ ア ゲー テー イー クー サー ター タリ
 カ ゼ ソ よ そ よー と ふー きー にー けー ハ
 タ ユ タ フ コ エー ノ キー コー ユー ルー ハ

三九



ウ タ フ ラー ラー ベー ノ コ エー スー ナー リ
 ニ コ る よー リー ニ そ た ちー めー らー し
 ナ ス ラ ケー キー 田 ノ ロ ビー キー ナー リ

第四教 歌曲(田家)

田 家

三	村の鎮守の	心よりこそ	風そよくと	切りて食うべ	裏の畑の	諸聲挙げて	背戸の小川の
安らけき世の	たたりたうく	たゆたふ聲の	安らけき世の	聞ゆるは、	ひびきなり。	をちこちに、	立ちぬらし。
吹きにけり、	涼しさに、	まくわ瓜	軍	花いばら	夕月夜	歌	声すなり。
笛	太鼓	吹きにけり、	涼しさに、	まくわ瓜	軍	花いばら	夕月夜

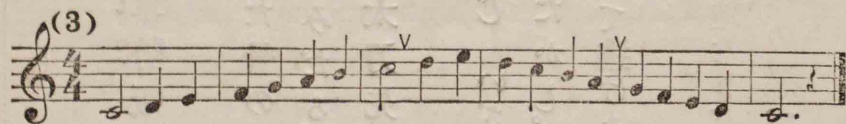
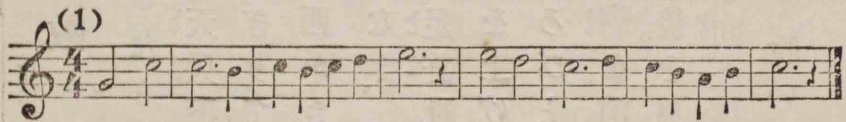
三八

第八練習曲

長音階の八音は、更らに其上にも、同様の音列の連続せるものにして、其階名もまた同一の呼稱によりて反復さるゝものとす。(第三教第六圖参照)

第五教 練習曲 (Do-Mi)

(下第一線を Do とす)



四一

第五教 加線

第五教 譜表の二

〔豫習箇條〕

〔設問〕 譜表の線及び間には、幾個の高低を異にせる音を記載し得るや。

加線 五線の譜表上に記載し得る所の諸音より、更に高きか又は低き音は、譜表の上又は下に短線を畫きて、其線上若くは線間にこれを排記するものとす。この短

線を加線と稱ふ。(第十圖)

斯の如き譜表外なる位置の名稱は、其上部にあるものは順次下より上に計へて、上第一間、上第一線、上第二間等と呼び、其下なるものは、順次上より下へ、下第一間、下第一線、下第二間等と稱ふるものとす。(第十圖)

第十圖

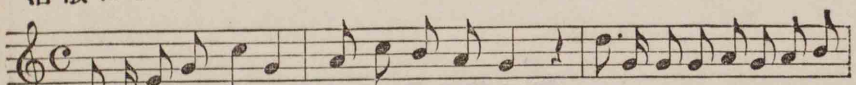


天兵無敵

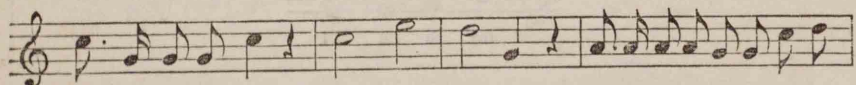
(下第一線をDoとす)

第五教 歌曲(天兵無敵)

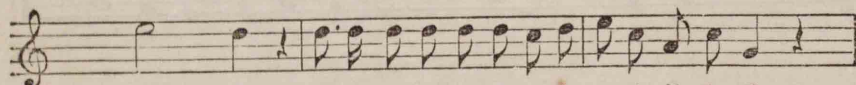
活潑に ♩=120.



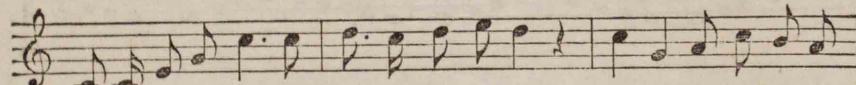
一、二、三、
 コローノヨクアキタラヌ アクマノカンゼイ
 セカイノウチナラビナキ ニツボんだんじの
 サスガノテキキモチケシ イノチチガシミテ



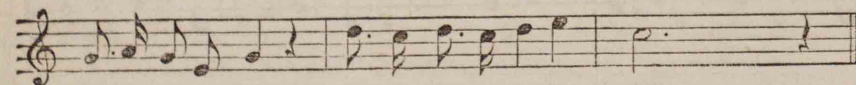
ハランス 振 天 動 地 テンベイクダリテ
 たちさきに 敵 軍 狼 狼 あしもとみだれて
 ニゲマドフ 喧 囂 囂 囂 ウシロチミセテゾ



征 ス ショー エ ン ホー セ イ ミ ナ ギ リ テ
 み ゆ しょー ぐ ん ば ち ゃー に げ ん を あ げ
 チ ル テ ン チ ノ セ イ ギ ニ ハ ム カ ヘ ヌ



チ ノ カ ハ マ タ ホ ネ ノ ヤ マ 南 北 トー ザ イ
 の が し ば せ じ い ざ す す め い 北 ざ も ろ び と
 ニ ゲ ユ ク テ ン チ ナ キ ヲ カ シ イ ザ カ ア ト チ



カ キ ク レ テ セ ン シ ン ミ ダ ル
 ま つ し ぐ ら か ん せ い た が し
 ヌ イ テ コ ヨ ミ レ ン ノ ア ク

四三

第五教 歌曲(天兵無敵)

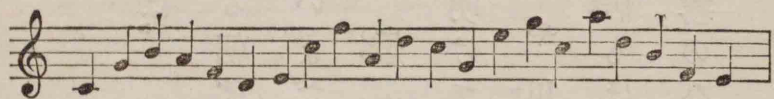
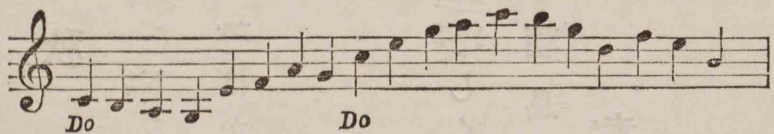
天兵無敵

- 一、 虎狼の慾あきたらぬ、悪魔の軍勢叛亂す、
 振天動地、天兵下りて征す、
 硝煙砲聲みなぎりて、血の河また骨の山、
 南北東西かきくれて、戦塵みだる。
- 二、 世界の内比びなき、日本男兒の太刀先きに、
 敵軍狼狽、足許亂れて見ゆ、
 將軍馬上に劔を上げ、のがしはせじ いざ進め、
 いざもろびと驀進、喊聲たかし。
- 三、 さすがの敵 膽を消し、命を惜みて逃げまどふ、
 暗囂狼藉 後を見せてぞある、
 天地の正義に双向へば、逃げゆく天地なきぞかし、
 いざ兜を脱いで來よ、未練の悪魔。

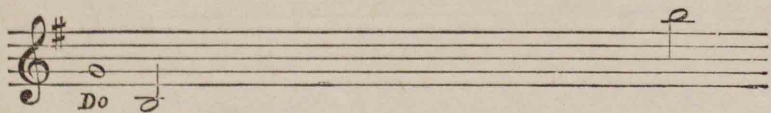
四二

問 題

(一.) 下記の楽譜に就き、下第一線上の音をDoと定めて、各音の階名を記せ。



(二.) 譜表の第二線上の音を以てDoと定め、さて下第二間より上第二間に至る間に含まるゝ所の、Do. Mi. Sol. La. の四音の總てを列記すべし。

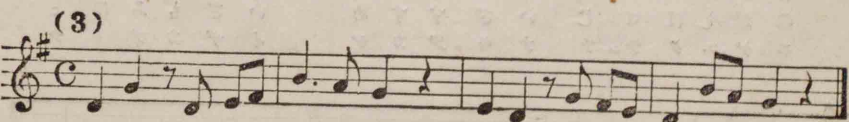
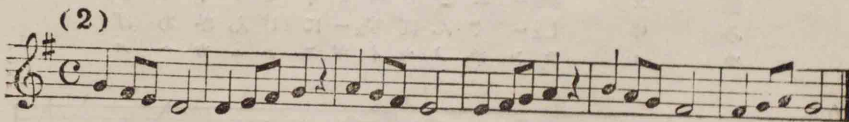
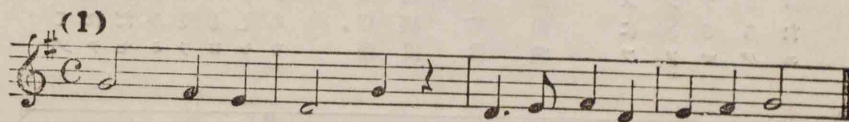


第九練習曲

朝 露 天

長音階の八音は、其下にも更らに同様の音列連続せり、其階名も亦 Do Si La Sol 等と順次に呼稱せらる。

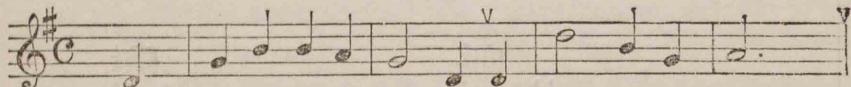
(第二線をDoとす)



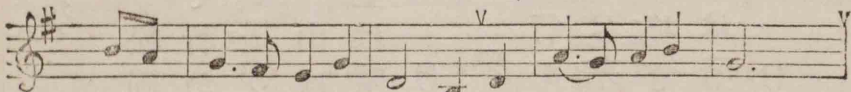
秋 曉

(第二線を Do とす)

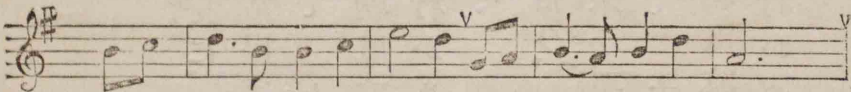
楽しく ♩ = 116.



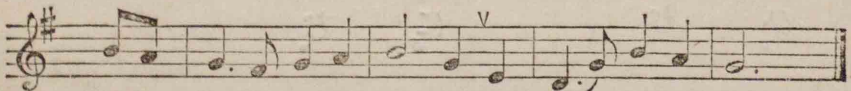
一. サ ギ リ ヲ ク ダ ル フ ナ ビ ト ハ
二. ろ ご ゑ す す し く よ は あ け て



コ— エ パ カ リ ナ ル ア サ— ボ ラ ケ
あ— さ と り な く や か は— や し ろ



キ— シ ム ラ イ マ ダ ユ— メ— ニ シ テ
あ— け の と り ゐ も ほ— の— ぼ の と



ト— モ シ ビ シ ロ シ ア キ— ノ カ ハ
さ— ざ り の ひ ま に み え— そ め ぬ

第五教 歌曲(秋曉)

四七

秋 曉

一、 狹霧を下る舟人は、

聲ばかりなる朝ぼらけ、

岸村いまだ夢にして、

燈火白し秋の川。

二、 櫓聲冷しく夜は明けて、

朝鳥啼くや川社、

赤の鳥居もほのくくと、

狹霧のひまに見えそめぬ。

第五教 歌曲(秋曉)

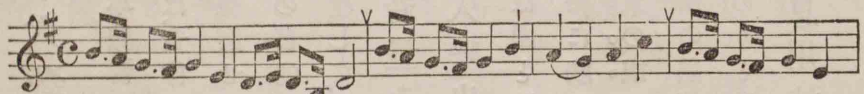
四六

秋の樂み

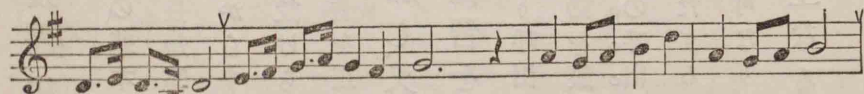
(第二線をDoとす)

第五教 歌曲(秋の樂み)

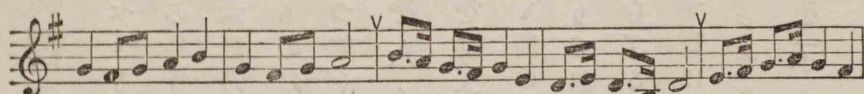
快活に ♩=152.



一 トーナリノサートノマーツオカ ターヅ子 ケーフーコソ
二 むかひのおかのくりはら たづね けふこそ



ユーカーメターケガリ ニ フクローチ サゲータ
ゆかめくりひる ひ ひるふは ささぐり

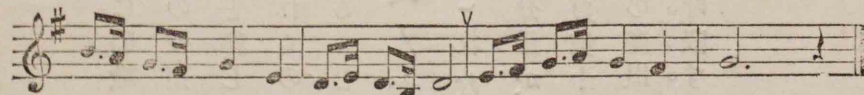


ベントサゲータ ヤマーホドトリーテツートニセ
おほぐりなぐり かつぎてさげてつとにせ



△ ミソーラハ ハレテ アサーカゼ スズーシ
む みそらは はれて あさかせすずーし

四九



ケーフーコソ ユーカーメターケガリ ニ
けふこそ ゆかめくりひる ひ

第五教 歌曲(秋の樂み)

秋の樂み

一、

隣の里の 松岡たづね、
けふこそ行かめ 茸狩に、

囊を提げて 辨當提げて、

山ほど取りて 土産にせむ、

み空は晴れて 朝風涼し、

けふこそ行かめ 茸狩に。

二、

向の岡の 栗原たづね、

けふこそ行かめ 栗拾ひ、

拾ふは茅栗 大栗小栗、

擔ぎて提げて 土産にせむ、

み空は晴れて 朝風涼し、

けふこそ行かめ 栗拾ひ。

四八

第六教 發聲基本練習の一

〔注意〕 基本練習 唱歌の基本となるべきものは人の聲音なり故に唱歌科に於ては、音律の高低、長短等を學ぶの外、各自の聲音、氣息、語韻等の使用法を充分練磨せざるべからず。以下第六教乃至第八教は、基本練習と稱して、専らこの目的の爲に設けられたるものなれば、唱歌者は屢々これらの練習を反覆して、以て聲音を正しく且つ美しく使用する事に慣るゝを要す。

氣息用法 音量を増加し、又聲音を永く持續するに堪へんが爲には、氣息吸入、呼出の練習を行ふを要す。氣息用法即ちこれなり。

〔參考〕 聲は固と肺臟より呼出せらるゝ所の空氣の或る密集せる分量が、氣管を通じて聲帯に觸れ、其振動を醸すによりて起るものなり(第五十六頁第十一圖)即ち聲は空氣の或る分量の呼出に外ならざるを以て、健全なる聲音の産出は、正しき呼吸方法の熟練に俟たざるべからず、實に唱歌術の基礎は善く呼吸する事に慣るゝにありと云ふて可なり(ランデッジェル氏)

今左に氣息用法の主なるものを示さん。

(甲) 緩吸緩呼法

- (1) 先づ直立の姿勢をとり、頭を眞直に保ち、胸廓を充分に開き、兩肩を後方に引き、さて少しく口を開き、徐々に空氣を吸入して、肺中に充滿するに至らしむべし。
- (2) 肺中に充滿したる空氣は、意を用ゐて其漏出を防ぎ、暫く之を持續することを務むべし。
- (3) 次に最初の姿勢を變更する事なく、徐々に且つ安靜に空氣を呼出すべし。(但し吸入吸出とも成るべく、長時に堪ふるやう務むべし)
- (4) 以上の方法を反覆すべし。

(乙) 緩吸急呼法 前記(甲)の方法に於ける、第一項及び第二項の順序を経たる後、急速に肺中の空氣を呼出する所の方法とす。

(丙) 急吸緩呼法 (甲)第一項の姿勢をとり、急速に空氣を吸入して後、第二及び第三項の順序により、徐に之を呼出する所の方法とす

(丁) 急吸急呼法 前條(丙)の方法によりて空氣を吸入し、急速に之を呼出する所の方法とす。

〔注意〕 多數の者が同時に右の練習を行ふ場合には、指揮者の鞭を擧ぐるに従ひて吸息し、之を下ぐるに従ひて呼息するを善しとす。なほ、緩呼の際には、穩和に(ア)音を發するも可なり。

毎朝新鮮なる空氣を呼吸して、此練習を行ふときは、獨り唱歌上に有益なるのみならず、又大に呼吸機の發育を助くるものなり。

但毎回一二分を超過すべからず。

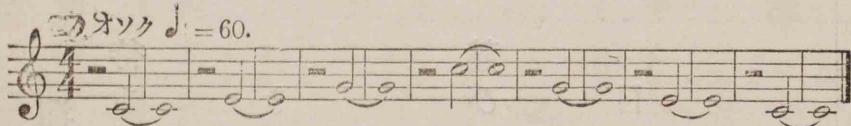
樂曲上に於ける吸息 歌曲の初めと、休止符のある所にては、常に充分なる吸息をとるべし。又歌曲進行中、休止符無き所にて吸息すべき場合には、樂句の切れ目に當る音符の、歷時の幾分を借りて、迅速に之を行ふべし。但吸息の爲に拍子の差異を來すべからず。又唇頭に一種の騷音を發すべからず。

練習曲

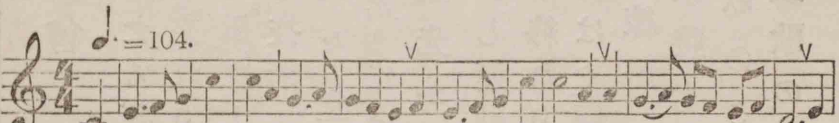
(樂曲上に於ける吸息練習)

(一) 下の練習曲に於て、休止符毎に充分なる吸息をとるべし。

(下第一線をDoとす、以下同じ)



(二) 下の練習曲は、樂句の切れ目に應じて、休止符なき種々なる部分に於て、吸息すべきものゝ一例なり。吸息は迅速なるを要す。

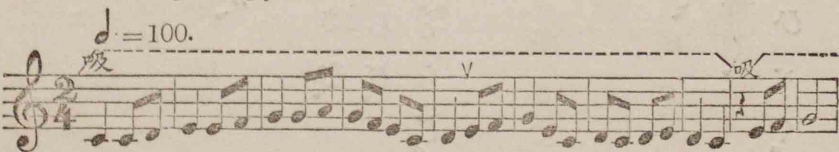


ハナハサクラキヒトハブシハナハサクラギヒトハブシ



ハナハサクラヒトハブシヨハナハサクラギヒトハブシ

(三) 下の練習曲は、長き曲節を一氣息にて歌ふべきものゝ一例なり。初めは記號(V)毎に吸息をとり、後には全曲を二分して、曲首と休止符とに於てのみ吸息すべし。



運動會

(下第一線をDoとす)

活潑に ♩=112.

第六教 歌曲(運動會)

三 マチニ マチニ タル ウンドー カイ キ タレーリ キ
 き そ ひ き そ ひ し う ん どー かい お は れーり お
 (マ・ホソク)

タレ リ アー ユー カー イ フク カセ
 は れ り あー ゆー かー い ひ は は

スー ズー シク ヒー ハー ワー ラー ラーニニカ
 かー たー む き ゆー ふ か ゼ すー すー し

ヒー ゴー シー ギー ジュー ツー 子ー のー ター テー ナー ミ
 ひー ゴー るー のー れー んー まー そー のー こー げー んー ち

セー イー ドー ー イー テー デー シー メー サン
 (マヘノハヤサニ)
 せー いー しょー れー つばー いー しー んー ばー んー すー みー て

イッ サ キ カ ケ テー オー クレハ ト ラ ジ
 が い かのこ ゑは て んにほひびく

rit.
 イッ サ キ カ ケ テー オー クレハ ト ラ ジ
 が い かのこ ゑは て んにほひびく

五五

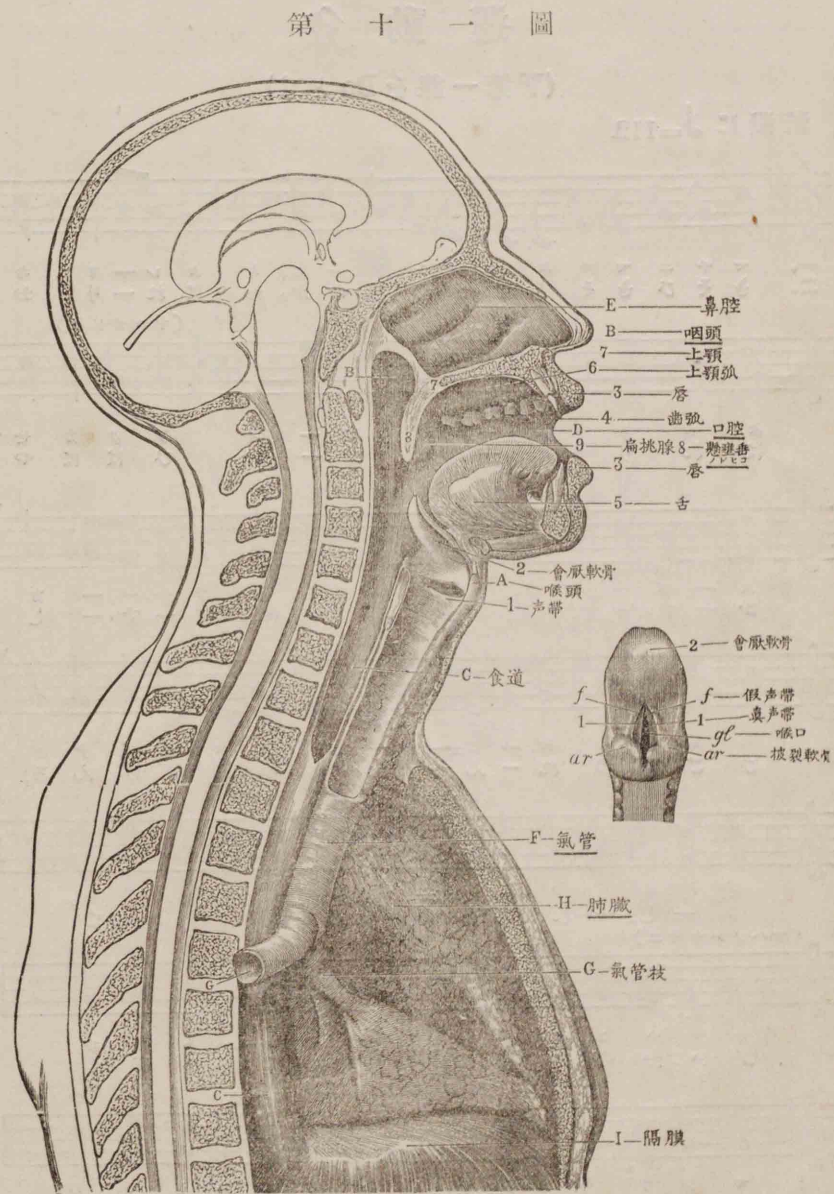
第六教 歌曲(運動會)

運動會

五四

一、待ちに待ちたる運動會、
 來れり來れり あ、愉快、
 吹く風涼しく 日はうら、か、
 きたへし技術 ねりたる技倆、
 正々堂々 いで、示さむ、
 眞先かけて 後れはとらじ、
 眞先かけて おくれはとらじ。

二、競ひきそひし運動會、
 終れり終れり あ、愉快、
 日ははや傾き 夕風す、し、
 日頃の練磨 その功顯著、
 優勝劣敗 審判すみて、
 凱歌のこゑは 天にも響く、
 凱歌のこゑは 天にもひびく。



第七教 發聲基本練習の二

聲區 人の聲質は、其發聲法の如何によりて、地聲、上聲及び裏聲の三區に分つことを得。この區域を聲區と云ふ。

男聲は普通、地聲と上聲との二聲區に分れる。

聲區適用法 凡そ唱歌は、高き聲を發する場合にも、又低き聲を用ゐる場合にも、終始同一の發聲法を以て歌ふべきものにはあらず。即ち低音には地聲、高音には上聲、又更らに頗る高き聲を發するには、裏聲を以てすべきものにして、これらの聲區を巧みに歌ひ分けて、音聲を温雅婉美ならしむる方法を、聲區適用法といふ。

〔參考〕聲區の別る、原因。總て音は共鳴の如何によりて、其音質を異にするものなり。さて人の發聲機關は、恰も樂器の構造の如く、先づ肺臟は輿風機軸の用をなし、聲帯は即ち發聲簧にして、氣管(胸部)咽頭(後頭部)及び口腔等(圖參照)は、皆共鳴を醸すの空窩(ラッパの管又ハ三絃)たり。聲區の分る、所以は、主としてこれらの空

第七教 發聲基本練習(聲區適用法)

窩の共鳴する部分及び其作用の異なるに原因するものなり。

今各聲區の音質及び共鳴する部分の差等に就て、大要を示せば左の如し。

(一) 地聲 地聲は最も強固廣潤なる音にして、其發聲には、喉頭、氣管共に大に擴張せられ、聲帯は全振動をなし、主として「胸部」全體の鳴響するものなり、故に或は之を胸聲とも呼べり。

(地聲は男子にありて最も主要なる聲區なり。)

(二) 上聲 上聲は地聲に比して稍細ほこきが如き音質を有し、呼氣の壓力及び分量も亦稍少なく、主として「喉及び口腔」の共鳴するものにして、又中聲の稱あり。

(上聲は女子にありて最も主要なる聲區なり。)

(三) 裏聲 裏聲は上聲に比して更らに細きが如き音質にして、呼氣の壓力、分量も一層少なく、主として「後頭の内部(咽頭)」の共鳴するものなり、故に又之を頭聲とも呼べり。

要するに以上聲區の差別は、發聲機關の形狀及び其作用の差、呼氣の方向、其分量及び壓迫の多少等によりて、聲音が「胸」「口」或は「頭」より出るが如き、特種の生理的感覚をおぼゆるものなれば、學習者は左記の練習曲に就きて、よくこれら感覚の差異を會得すべし。

練習曲

(聲區適用法練習)

(女子用)

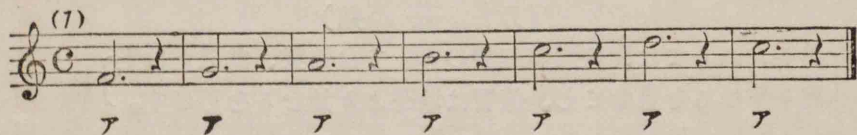
〔聲區適用法の練習は(女子にありては)先づ上聲より始めて、裏聲に及び、最後に地聲に移るを以て、最も自然に適へる順序とす。〕

(一) 上聲の區域と其發音法

この聲區を發音するには、氣息を上齒の後に向けて呼出すべく、聲音恰も喉の下部より出で來り、喉頭及び口腔内に鳴響するが如き感あるべし。(下の練習に於て口形は微笑する時の如かるべく、舌は平らに保ち、舌端を軽く下齒の後に付け、強て之に力を加ふべからず。開口の度は、拇指を挿み得る程なるべし。)

(上聲は、女子には通常平易に發音し得らるゝものなり。)

(下第一線を Do とす、以下同じ)



(二) 裏聲の區域と其發音法

この聲區の發音には、氣息を斜めに上顎に向けて軽く呼出すべく、其聲音恰も後頭内部に鳴響するの感あるべし。(世俗に高き聲を形容して、「頭の頂天より出る」と云ふは、蓋しこの感覺を云ひ表はせるなるべし。)喉の筋肉は大に狹縮せらるべく、開口の度は上聲に於けるより廣かるべく、氣息の入用は却て大に減すべし。(呼氣の分量を減する程、聲音は純清明澄となるべし。)



(聲區適用法練習)

(女子用つき)

(三) 地聲の區域と其發音法

この聲區の發音は、呼氣に稍力を入れて(強壓すべからず)少しく下方に向けて發出すべく、聲音恰も肺の下部より出で、胸腔の全部鳴響するの感あるべし。(世俗に「腹より出る聲」と云ふはこの義なるべし。)發聲機の位置は氣管の充分なる擴張の爲に不降し、口腔の長さは従つて伸大せらるべし。開口の度は上聲に於けると等し。



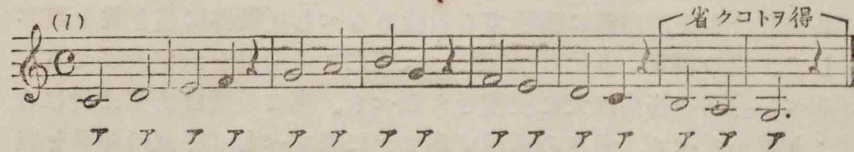
聲區適用法練習

(男子用)

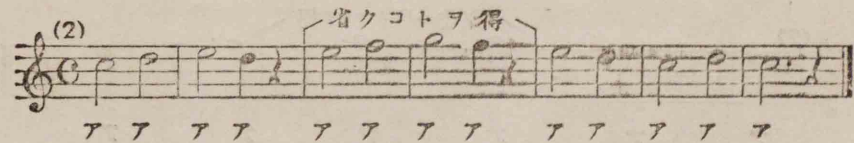
〔男聲にありては、普通第三間の音までは地聲、其以上は上聲を用ゐるを適當とし、練習は地聲より始むるを可とす。〕

(一) 地聲の區域と其練習曲

(男聲の地聲は其區域女聲よりも廣し。發音法は前記の如し。)



(二) 上聲の區域と其練習曲



〔注意〕

上聲或は裏聲を以て歌ふべき頗る高き音をも強ひて地聲を張り上げて歌ふが爲め、聲音は嘎れ、唱歌は恰も絶叫の如くなるの弊は、往々我學校唱歌に認むる所なり。これ蓋し聲區の運用を知らざるより起る所の一大瑕瑾なれば、學習者は充分注意して本教の練習に勵み、決してかゝる過ちに陥ることなからんを要す。

聲區の調和

發聲上、一の聲區より他の聲區に移るには、巧に之を

接続するにあらざれば、聲色の平均を失ひて、不快なる結果を生ずべし。故によく兩區の聲音を節調して、流暢に之を联接することを勉むべきなり。これを聲區の調和とはいふ。

殊に地聲の高きものは、勢ひ粗暴になり易く、又上聲の低きものは、微弱に成り易きものなれば、之を接続するには、地聲を和らげ、上聲を強めて、よく其平均を保つことを練習すべし。

人の聲機は、一聲區の最も高き音を、次ぎの聲區に屬する聲にても歌ひ得るものなれば、二聲區接合の練習は、先づ同一音を二聲區の聲にて歌ひ分くることより始むるをよしとす。(ラブラッシ氏による)

練習曲
(聲區の調和練習)
(女子用)
(下第一線をDoとす)

(男子用)

發音上の禁則數件

一、齒はまた共鳴を助くるものなれば、唇を以て強く之を包むべからず。

一、鼻腔も亦共鳴すと雖も、この共鳴は唱歌上厭ふべき鼻聲はなごゑを醸すにより是を避くべし。上臑の奥に垂下せる、懸壅垂のぶひ(第十一圖)は、發音の際、後方に伸びて、氣息の鼻へ漏るゝを遮るの作用を爲すものなれば、鼻聲の癖ある者は、懸壅垂をしてこの作用を營ましむる事を練習すべし。又時々鼻を摘みて發音を試むべし。

一、また往々詰喉音カタカタをなすものあり、禁すべし。これ舌根或は喉の筋肉を締め付けて發音するによりて起るの弊なり。欠伸アソビする時の如

く、安易に口を開きて發音する事を習うて之を矯正すべし。

一、或る高度の音を發するに、直ちに其音を發せずして、稍低き音より擦り上ぐるが如き發音をなすものあり、これまた禁すべし。格別の場合の外は常に直ちに其高度の音を發すべきなり。

一、一發音を終る際には、氣息の残りを徐かに留むべし、投ぐるが如き音を殘すべからず。又一發音毎に口を閉づべからず。

一、一音より他の音に移る際、胸或は喉の衝壓を與ふべからず。これ恰も一本指にてピアノを弾くに等しければなり。

四季の散歩

〔説示〕 音符の上若くは下に附記されたる小點は、之を圓點と呼び、軽く、切れぎれに、且つ分明に歌ふべきを示す記號なり。又同じく小線は、之を横線と呼び、圓點に反し、音長を充分保持して歌ふべきを示す記號なり。されば圓點と横線とが同時に附記せられたる場合には、音頭を軽く當り、音尾を引くが如きこゝろにて歌ふべきなり。

第七教 歌曲(四季の散歩)

愉快に ♩=126. (第二線をDoとす)

mf

ハハハハ
ルツキユ
ハナア
ヤヤヤ
シシシ
ノノノ
タタタ
モモモ
ニニニ
ヨヨヨ
キキキ
シシシ
ノノノ
タタタ

ニニニ
カトフ
オホエ
ガク
ラミナ
クツシ
サツム
ニゲニ
ノカハ
ソニニ
クールの
サキチ
メミガ
ウナハ

ハハハハ
ケケケ
ユユユ
ラララ
アブア
ラララ
アブア
チチチ
ミミミ
ノコナ
ノチの
サダマ
グナモ
チアケ

カシル
ノスハ
ハハハ
ハハハ
コココ
ニニニ
キキキ
サササ
リリリ
ヨヨヨ
ナゼキ
ハカツ

六五

第七教 歌曲(四季の散歩)

四季の散歩

一、たのしき世にも たのしや春は、
梅咲く園に さくらが岡に、
小草の野路 道遙行けば、
花よりさきに こゝろは 長閑。

二、たのしき世にも たのしや夏は、
並樹の木蔭 池塘の邊、
青田の小路 ぶら／＼行けば、
風よりさきに 心は 涼し。

三、樂しき世にも 樂しや秋は、
萩らる庭に 蟲なく晩方、
雲間をながめ ぶら／＼行けば、
月よりさきに こゝろぞ 晴る。

四、樂しき世にも たのしや冬は、
末枯の里回 かと田の畷、
小川の橋 ぶら／＼ゆけば、
雪よりさきに 心ぞ 清き。

六四

第八教 發聲基本練習の三

發韻法 言語歌謠の素なる人聲語韻の變化を學び、正しく之を發音する方法を發韻法と云ふ。

母韻と子音 我國の語韻中、アイウエオ

の五個音は、之を母韻と云ひ、他は之を

子音と云ふ。(第十圖) (圖中、縦の並びを行と云ふ)

各母韻は、ア、イ、の如く之を長呼するとも、其音

韻を變ずることなし。之に反して各行の子音は、之

を長呼すれば、カ、ア、サ、ア、又はキ、イ、シ、イ等の如く、皆

其音尾は其列の母韻にかへるものとす。(第十二圖)

〔參考〕 語韻の使用法は、普通の會話に於ける場

合と、唱歌の場合と、稍其趣を異にせり。即ち唱歌

は會話に比して、音尾を保持すること多きもの

なれば、從て母韻の響くこと會話よりは多く、且

第二十圖

カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

つ長しと知るべし。

母韻の發韻法 母韻の差別は、主として開口の度(下顎を下の度)舌の位

置(委しく云へば舌の前部、中部、後部若くは全部を、口腔内の下段、中段、若

の形狀(下に開き、横に引き、丸く)に關して生ずるものなり。

今各母韻の發韻法を學ぶに當り、先づ左の通則を記憶すべし。

五母韻を通じて、舌端は常に軽く、下齒の後に附け置くべく、又

「兩唇の間」、「兩齒の間」及び「舌と上顎との間」には、必ず常に其音

韻に應じたる多少の間隙を存すべきものなることを忘るべ

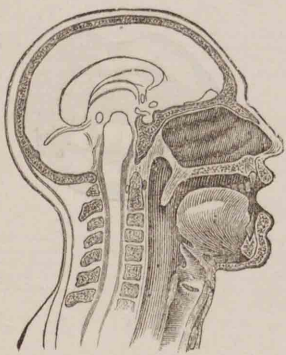
らず。(此の間隙は、特に唱歌に於ては、會話に於けるより廣きを要す。)

(ア) 韻 先づ口を大きく開き、(齒間に二指を)挿み得るほど、舌は安易に平らに保ち

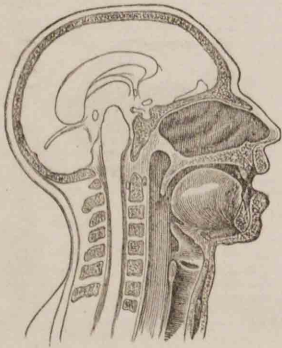
て、口腔の下部に装置すべし。(第十三圖を参照し、練習曲(1)に就て實習すべし)

(エ) 韻 口を扁平に開き、(齒間の廣さは、挿み得る程なるべし)舌の中部を、口腔の中

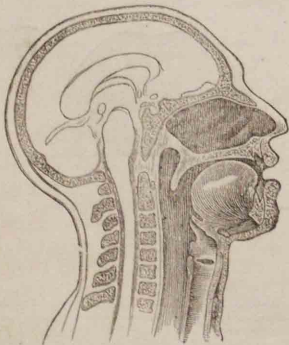
段に装置すべし。(同上参照) (並に實習)



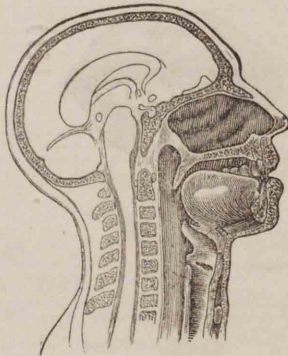
(ア)



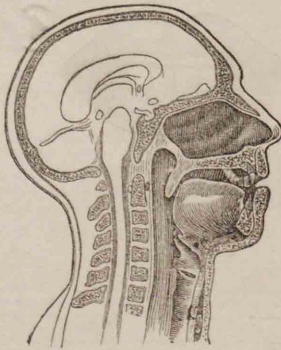
(エ)



(イ)



(オ)



(ウ)

(イ) 韻 口を扁平に開きたるまゝ、更に之を狭め、(齒間の廣さは小増を挿み得る程なる)

(エ) 舌の前部(舌端に)を、口腔の上段に装置すべし。(同上参照)

(オ) 韻 口を稍窄めて圓く開き、(齒間の廣さは母指の幅よりも少しく廣かるべし)舌の後部を、

口腔の中段に装置すべし。(同上参照)

(ウ) 韻 口を圓く開きたるまゝ、更に之を狭めて、(齒間の廣さは小増を挿み得る程)兩

唇を突き出し、舌の後部を、口腔の上段に装置すべし。(同上参照)

以上五母韻の發音は、口形の圓と平とに従つて、また左の如く分つことを得べし。

廣圓

ア

中圓

オ

狹圓

ウ

中平

エ

狹平

イ

發音に際し、齒を喰ひ締むる弊殊にイ韻及びウ韻に於てあるものは、兩齒間に適當の木片などを狭みて練習すべく、又舌を正當の位置に保持すること能はざるものは、薄き竹片或は裁縫用の型附等を以て、舌を壓して之を矯正すべく、又屢々鏡を用ゐて、よく口舌の形狀位置を檢し、之を正すをよしとす(なほ六十三頁發音上の禁則を参照すべし)

練習曲

(發韻練習)

(注意) 或る韻を發聲するが爲に一旦定めたる口舌等の位置は、其韻を保持する間、變更すべからず。

(下第一線を Do とす)

第八教 發韻練習曲

(1)

ア エ イ オ ウ

(2)

ア エ イ オ ウ

(3)

ア エ イ オ ウ

(4)

ア エ イ オ ウ

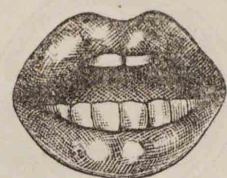
(5)

ア エ イ オ ウ

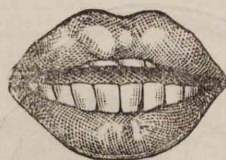
(6)

ア エ イ オ ウ

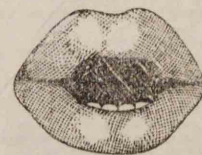
第十三圖 (乙)



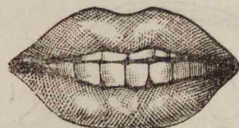
(ア)



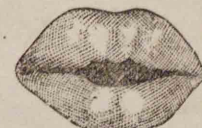
(エ)



(オ)



(イ)



(ウ)

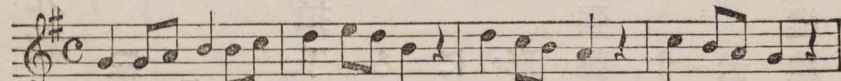
第八教 母韻の口形圖解

集 會

(第二線をDoとす)

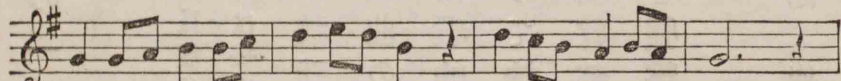
第八教 歌曲(集會)

愉快に $J=130$



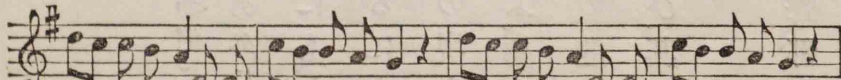
一. クッーコノー ツドーロ タノーシ ウレーシ
二. げーこのー まどーあ うれーし たのーし

發韻練習(ウウーオオー アアア オオーウウーウ)
口形……狭圓……中圓…… 廣圓……… 中圓……… 狭圓………



コヨーロチー オカーデ カターラハー ▲
へだーてぬー とゝーの つどーひしー て

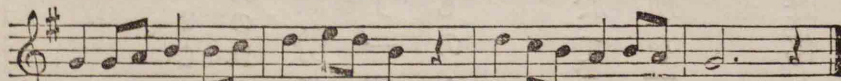
(アアーエエー イイーエ アアーエエー イ)
廣圓……中平…… 狭平……中平 廣圓……中平…… 狭平



カタルコトバ ウーツクシ サークルハナニ マーサレリ
かたる ところ きよらに すめるつきに まされり

(イーエエアエエ イーエエア アーオオウオオ アーオオウ)

七三



マコートノー ロヨーロ タフトシー ヤ
まことのー とものー ゆかーしさー や

イイーウウー イイーウ イイーエエー ア

第八教 歌曲(集會)

集 會

一、今日このつどひ たのしうれし、

心を置かで 語らばむ、

かたることばうつくし、 咲ける花にまされり。

まことの心 たふとしや。

二、けふこのまどあ うれしたのし、

隔てぬ友の つどひして、

かたる心清らに、 すめる月に勝れり。

まことの友の ゆかしさや。

七二

第九教 拍子の一

〔豫習箇條〕

〔設問〕 音の長短及び高低は如何にして表示せらるゝを。

〔説示〕 音には長短高低の差の外にまた強弱の別あり。

拍子 吾人が談話する際にも、自ら其語勢に強弱あるが如く、樂曲の進行するにも、亦必ず一定の形式によりて、循環的に強弱の現出するものなり。この形式を名けて**拍子**といふ。(第十四圖)

強聲部及び弱聲部 樂曲の進行中に於て、音勢の存する箇所を**強聲部**と云ひ、其他の箇所を**弱聲部**と云ふ。

縦線及び小節 樂曲の強聲部及び弱聲部は、之を

第十四圖
(下第一線を Do とす)



別するに便ならしめんが爲、各強聲部に當る音符の前毎に、譜表を貫通する所の**縦線**を置きて之を區劃す。此の各一區劃を名けて**小節**と云ふ。(第十四圖)

また樂曲の終結或は段落等を示すには、二條の縦線を用ゐ、之を**複縦線**といふ。

通常、一樂曲の各小節は、皆等一なる拍數を以て成るものなり。但し此の拍數中には、休止符をも算入すべきこと勿論なり。

拍子記號 拍子に數種の別あり。樂曲の首めに算用數字を重ね記して(或は他の記號を置きて)これを表示す、**拍子記號**即ちこれなり。(第十五圖及十六圖)

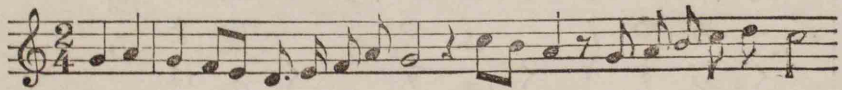
二拍子 一小節間に二拍宛を有し、其第一拍は「強」、第二拍は「弱」の順序を以て進行する所の拍子を**二拍子**といふ。

二拍子の種類 通常用ゐる所の二拍子には、四分の二拍子と二分の二拍子との二種あり。

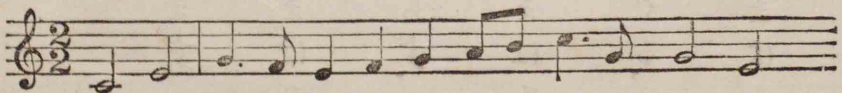
問題

- 一. 四分音符、八分音符及び四分休止符を用ゐて、四分の二拍子六小節を記せ。
- 二. 二分音符、四分音符及び二分休止符を用ゐて、二分の二拍子六小節を記せ。
- 三. 下の樂譜に就き、正しき位置へ縦線を記入し、且つ各強聲部と弱聲部とを指示せよ。

甲. (下第一線をDoとす)



乙. (同上)



第十五圖 (下第一線をDoとす)



第十六圖 (同上)



(一) 四分の二拍子 四分の二拍子とは、四分音符一個の値を以て一拍となし、毎小節に、四分音符二個、若くは之に相當する音符又は休止符の數を有するものなり。其拍子記號は $\frac{2}{4}$ の如し。(第十五圖)

(二) 二分の二拍子 二分の二拍子とは、二分音符一個の値を以て一拍となし、毎小節に、二分音符二個、若くは之に相當する音符又は休止符の數を有するものなり。其拍子記號は $\frac{2}{2}$ 或は ϕ を以て表はさる。(第十六圖)

二分の二拍子に於ては、二分音符を一拍と計ふるが故に、他の諸音符の時價も、從來學びたるものとは、其割合を異にするものを知るべし。

めぐる車

一、めぐるはよどの川瀬のくるま、
 くるくいつもまはりて止まず、
 眞夏の空も紅葉の秋も、
 時をもしらでくるくまはる。

二、めぐるは谷の米つきぐるま、
 ことくついてやすみもしらず、
 花咲く春も雪ふる冬も、
 いのちのかぎりくるくまはる。

三、のきばの風はそよく吹いて、
 くるく車やすまでめぐる、
 ねむれる稚子のゆめちの伴に、
 しづかに鳴りてくるくまはる。

めぐる車

〔設問〕 當曲は何拍子なりや又其強聲部と弱聲部との位置を問ふ。

(下第一間をDoとす)

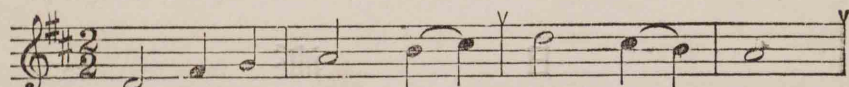
楽しく ♩ = 132.

聖壽無量

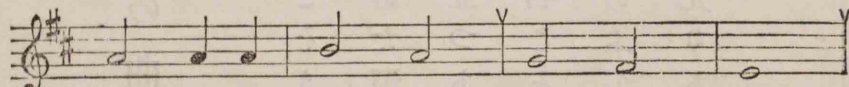
〔設問〕 當曲は何拍子なりや。又幾小節より成れりや。

(下第一間をDoとす)

嚴肅に ♩ = 50.



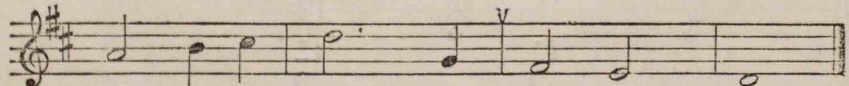
一、 ト コ ト ハ ニ ミ ヨ ハ
 二、 お ほ が み の み す る



ア メ ツ チ ト ト モ ニ
 わ が あ ふ ぐ き み は



カ ハ ル コ ト ナ シ ト
 げ に や ち よ や ち よ



オ ホ ガ ミ ハ ノ ラ ス
 か み な が ら い ま せ

第九教 歌曲(聖壽無量)

八一

第九教 歌曲(聖壽無量)

八〇

聖壽無量

一、 とことはに御世は

天地と共に、

湊ることなしと

大神は宣らす。

二、 大神のみする

わがあふぐ君は、

げにや千代八千代

神ながらいませ。

太平の曲

〔設問〕 當曲は何拍子なりや。

(第二線をDoとす)

莊大に ♩ = 66.

三
ウ
ラ
ヤ
ス
ノ
ナ
コ
ソ
ウ
ベ
ナ
レ
ヨ
モ
ー
ノ
ウ
ガ
シ

ミ
ニ
タ
ク
ツ
の
ア
ダ
ミ
モ
ナ
カ
ガ
リ
ケ
リ

八三

タ
ク
ツ
の
ア
ダ
ミ
モ
ナ
カ
ガ
リ
ケ
リ

第九教
歌曲(太平の曲)

第九教
歌曲(太平の曲)

太平の曲

一、

浦安ウラヤス

の名こそうべなれ

四方の海に、

立つあだ浪も なかりけり、

立つあだ浪も なかりけり。

二、

日本の名こそうべなれ

天地あめつちに、

光りあふがぬ 國もなし、

光りあふがぬ くにもし。

八二

第十教 拍子の二

〔豫習箇條〕

〔設問〕 二拍子とは如何。また二拍子の種類を問ふ。

四拍子 一小節間に四拍宛を有する所の拍子を四

拍子と云ふ。四拍子に於ける強聲部及び弱聲部の

位置は、毎小節の第一拍「強」、第二拍「中弱」、第三拍「中強」、

第四拍「弱」の順序によるものとす。(第十七圖)

四拍子の種類 通常用ゐらるゝ所の四拍子には、四

分の四拍子及び八分の四拍子の二種あり。

(一) 四分の四拍子 四分の四拍子とは、四分音符一

個の値を以て一拍となし、毎小節に四分音符四

個、若くは之に相當する音符又は休止符の數を

第十七圖
(下第一線をDoとす)



有するものなり。其拍子記號は、 $\frac{4}{4}$ 或はCとす。

(第十七圖)

(二) 八分の四拍子 八分の四拍子とは、八分音符一

個の値を以て一拍となし、毎小節に、八分音符四

個、若くは之に相當する音符又は休止符の數を

有するものなり。其拍子記號は $\frac{4}{8}$ とす。(第十八圖)

問 題

(1) 八分音符を一拍に計ふるときは、四分音符及び二分音符の拍數は如何。

(2) 各小節に成るべく異りたる音符を用ゐて、四分の四拍子六小節を記せ。

(3) 同上の方法により、八分の四拍子四小節を記せ。

第十八圖
(下第一線をDoとす)



師の恩

〔設問〕 當曲は何拍子なりや又其強聲部及び弱聲部の位置を問ふ。

(下第一間をDoとす)

和らかに ♩ = 112.

二. ア フ ゲ バ タ カ キ シ ノ メ ケ ミ ア ー レ チ
三. お も へ ば ふ か き し の な さ け わ ー れ な

チ シ ヘ テ チ モ ゴ ロ ニ マ ナ ヒ ノ ミ チ ノ
み ち び き れ も ご ろ に た だ し き み ち な

シ ナ リ シ ー ツ フ ミ ノ ハ ヤ シ ノ シ ル ベ
さ と し つ ー つ む か ふ と こ ろ を し め し

シ ー ツ サ マ ブ タ ヌ マ ブ ト ル ム チ ノ
つ ー つ う ま す た ゆ ま す と る ー む ち の

ヨ ゴ ト ニ コ モ ル ソ ノ メ ケ ミ
よ こ と に こ も る そ の な さ け

第十教 歌曲(師の恩)

八七

第十教 歌曲(師の恩)

八六

師の恩

一、 仰げば高き師のめぐみ、
我を教へてねもごろに、
學びの道のしをりしつ、
文ふみの林はやしのしるべしつ、
倦うまず弛ゆるまず執とる鞭むちの、
節ふし毎ごとにこもるそのめぐみ。

二、 思へば深き師のなさけ、
われを導みびきねもごろに、
正ただしき道をさとしつ、
向ふところを示しつ、
倦うまず弛ゆるまずとる鞭むちの、
節ふし毎ごとにこもるそのなさけ。

凱 旋

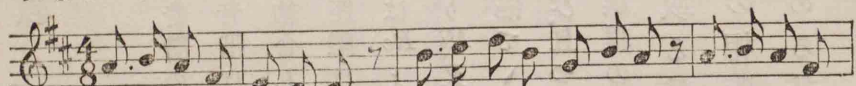
〔設問〕一、當曲は何拍子なるや。

二、最終の音符に附記せられたる〇は何と云ふ記號にして、何の用をなすものぞ。

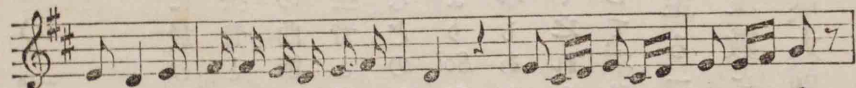
第十教 歌曲(凱旋)

(下第一間をDoとす)

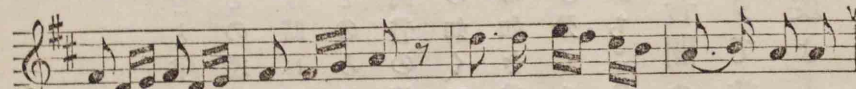
勇ましく ♩=168.



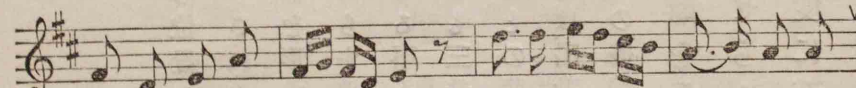
一、タタカヒカチテ ヲガゲンカヘル ケフバン
二、たたかひかちて わがぐんかへる きみばん



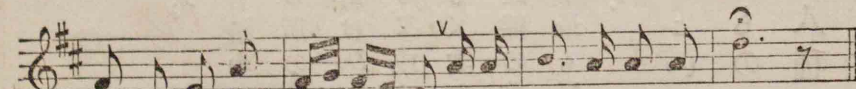
ザイノカチドキアゲテ ヲローゴビヨバフ
さいの がいかをあげて よろこびいさむ



ヒビキノースエニ ミソラーノクモモ
こゑごゑたか し しかいのなみも



マソデナ フーリーテ キミガヨーチヨニ
これより やすく みくにのひかり



ヤチヨト イーフメテ タノミヨヤ
あふがぬ そらほげにこそあらじ

八九

第十教 歌曲(凱旋)

凱 旋

一、戦鬪かちて 我軍かへる、

今日萬歳の凱歌あげて、

よろこびよばふ ひびきのするに、

み空の雲も 眞袖をふりて、

君が代千代に 八千代といはふ、

めでたの御世や。

二、戦鬪かちて 我軍かへる、

君萬歳の凱歌をあげて、

よろこび勇む 聲々たかし、

四海の波も これより安く、

みくにのひかり あふがぬ空は、

げにこそあらじ。

八八

第十一教 音程の一

〔豫習箇條〕

〔設問〕 長音階の音列に於ける全音と半音との位置を問ふ。

〔説示〕

長音階は畢竟全音と半音との連続なり。されども音階中の諸音が結合して、一の曲節を成す時は、其曲節を形成する所の各音間の距離は、常に全音と半音とのみにはあらず。或る時は *Do* より *Do*、又は *Re* より *Re* などの如く、同音の連続せる事もあり、又或時は *Do* より *Mi*、又は *Re* より *Sol* などの如く、二音をも三音をも又其以上をも隔て、進む事もあり。此の如き音と音との間の、距離の差ひを學び、且つ正しく之れを歌ひ分くる練習は、唱歌術中最も緊要なる課程の一にして、本教は即ちこの課程の發端なり。

音程 或る音より或る音に至る二個音間の距離を音程といふ。

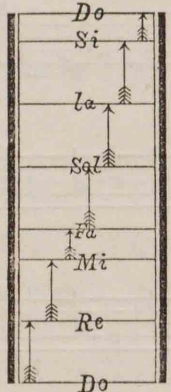
音程は皆二個音の相距る度数によりて差別せらるゝものにして、長音階中に含める音程は、大別一度より八度に至る八種あり。

(一) 一度音程 一度音程とは、即ち同音の義にして、例令ば *Do* より *Do*、又は *Re* より *Re* に至るが如きものを云ふ。

(二) 二度音程 二度音程を分ちて、長二度音程及び短二度音程の二種とす。

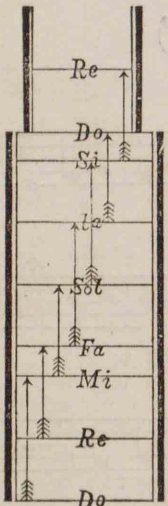
長二度音程は一全音より成り、短二度音程は一半音より成る。(第十九圖)

第十九圖



(三) 三度音程 三度音程を分ちて、長三度音程及び短三度音程の二種とす。

第二十圖



第十一教 音程

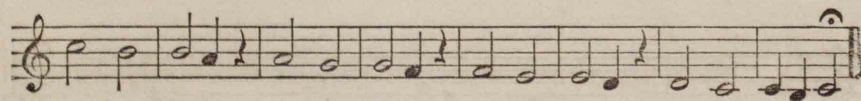
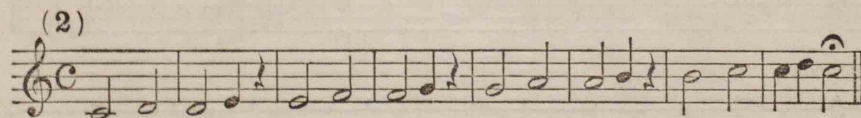
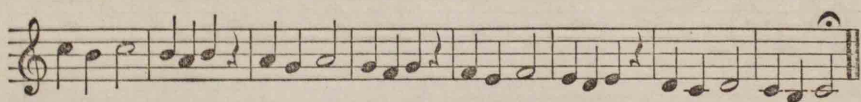
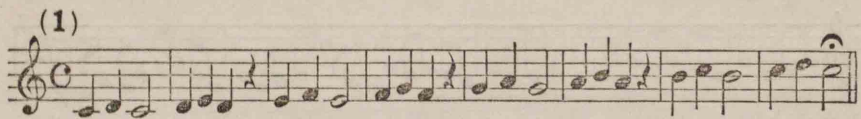
長三度音程は二個の全音より成り、短三度音程は一個の全音と一個の半音とより成る。(第二十圖)

二度音程練習曲

第十一教 二度音程練習曲

- 一. 音程は曲節の要素なり、蓋し曲節は、音程の連続せるものと看做すことを得ればなり。
- 二. 音程の練習に熟達すれば、曲節の高低は自ら明かなるべし。
- 三. 音程の練習を行ふには、既習の發聲基本練習を總て之に應用する事を務むべし。

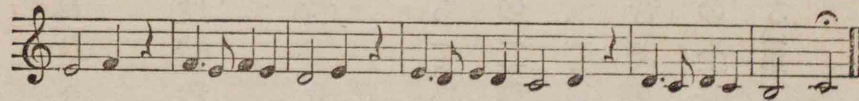
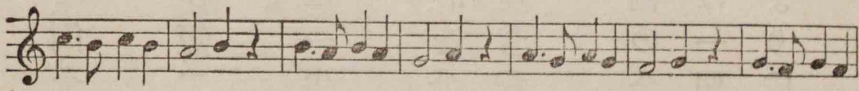
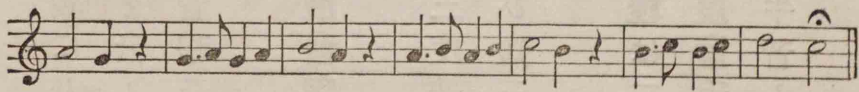
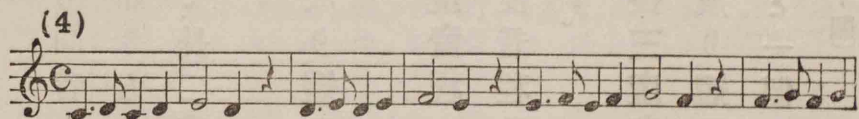
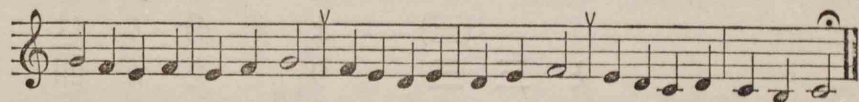
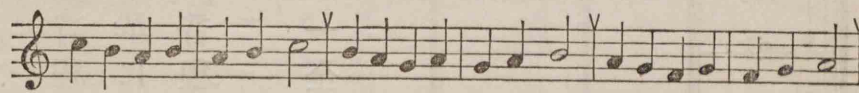
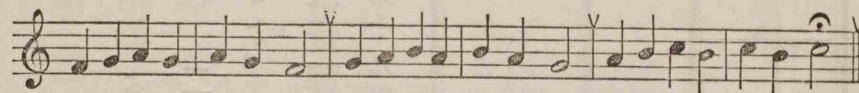
(下第一線を Do とす)



九三

二度音程練習曲(つゞき)

第十一教 二度音程練習曲

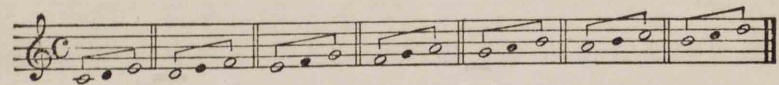


九二

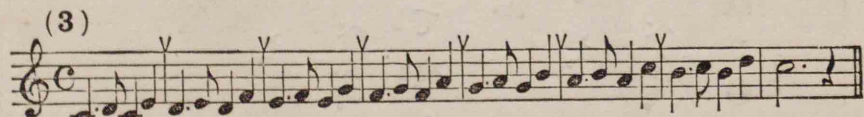
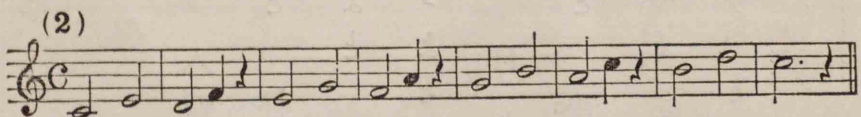
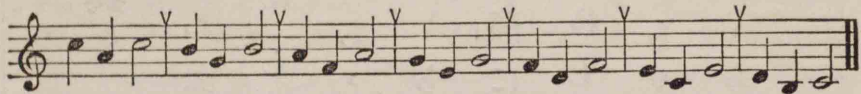
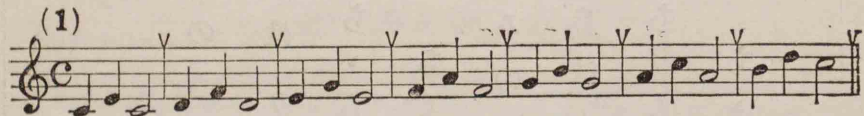
三度音程練習曲

(下第一線を Do とす)

第十一教
三度音程練習曲



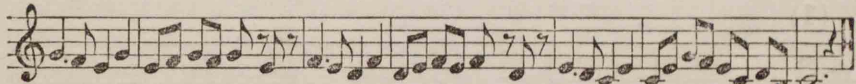
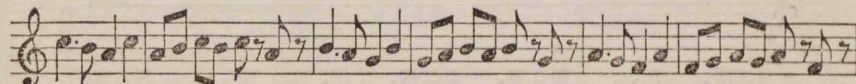
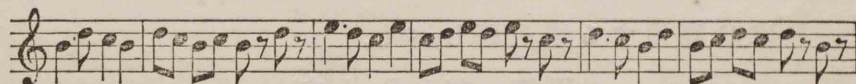
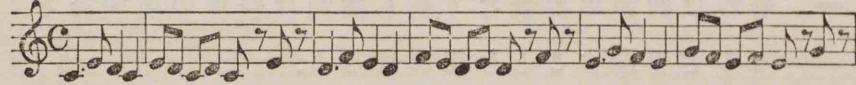
〔設問〕 上記の三度音程中、何れが長三度にして、何れが短三度なりや。



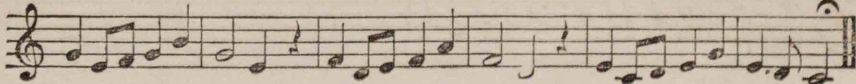
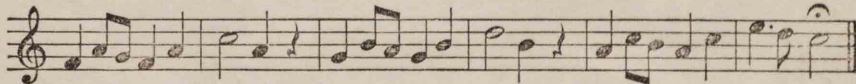
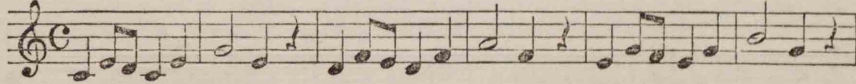
九五

三度音程練習曲(つゞき)

(4)



(5)



第十一教
三度音程練習曲

九四

冬 興

〔設問〕一、當曲の第三段第一小節内の音程を問ふ。

二、當曲は何拍子なりや。

〔説示〕樂曲は常に必しも強聲部より始まるものにはあらず。即ち當曲の如きは弱聲部より始まるものにして、其最初の小節は之を最終の小節と合せて、始めて完全の拍數となるものなり。この種の小節を不備小節といふ。

穩かに ♩ = 112. (第二線を Do とす)

一、ムーカヒノサーサーヤブミユキゾツモー
 二、うしろのかはせにつきかげらーかー
 ル スーズメハツレーシトコね
 ぶ ちーどりはうーれーしとね
 エーターテーテチーチチチチチ
 にーたーてーてちーりちりちり
 ヨトトーモドチヨベーバチー
 やととーもどちよべーばちー
 ヨチヨチーチーヨ トムレーテキタール
 ちちちーりーや と き てーはさわーぐ

第十一教 歌曲(冬興)

九七

冬 興

一、向ひのさゝやぶみ雪ぞつもる、

雀はうれしと 聲たてゝ、

ちゝくちゝよと 友達よべば、

ちよくちよと むれて來る。

二、うしろの川瀬に 月かげ浮ぶ

千鳥はうれしと 音にたてゝ、

ちゝくちりやと 友達よべば、

ちゝくちりやと 來てはさわぐ。

第十一教 歌曲(冬興)

九六

第十二教 發想の一

〔豫習箇條〕

〔設問〕 一、 樂曲の進行に伴れ、或る一定の區間を隔て、強聲と弱聲とが循環的に連續する様を何と云ふや。

二、 縦線と強聲部及び弱聲部との關係如何。

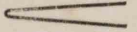
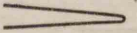
發想法 音聲に濃淡弛迫等の變化を與へて、曲節に美しき陰影彩色を施し、以て樂曲の趣味感想を發揮する方法を發想法といふ。

發想の方法及び其記號に種々あり、今先づ其強弱に關するものを説かん。

強弱記號 拍節に伴ふて自然に起る所の、強聲部と弱聲部との循環的連續の外、發想上の要求より、樂曲の部分によりて、音聲に濃淡強弱を與へ、又は或る音に特別の強みを加ふべき事を表はす記號を、強弱記號といふ。

通常用ゐる所の強弱記號は左の如し。

(一) 譜表の上部又は下部に附記せられて、其部分の強弱を示すもの。

(略號)	(術語)	(意義)
<i>p</i> ……	^{ピアーノ} (Piano.) ……	弱く。
<i>pp</i> ……	^{ピアーニシモ} (Pianissimo.) ……	頗る弱く。
<i>f</i> ……	^{フォルテ} (Forte.) ……	強く。
<i>ff</i> ……	^{フォルテッシモ} (Fortissimo.) ……	頗る強く。
<i>mp</i> ……	^{メツォ ピアーノ} (Mezzo Piano.) ……	稍弱く。
<i>mf</i> ……	^{メツォ フォルテ} (Mezzo Forte.) ……	中等の強さに。
 <i>Cresc.</i> ……	又は… ^{クレッシェンド} (Crescendc.)	漸次に強く。
 <i>Dim.</i> ……	又は… ^{ディミヌエンド} (Diminuendo.)	漸次に弱く、
<i>Decresc.</i> ……	^{デクレッシェンド} (Decrescendo.)	

(二) 音符の上或は下に附記せられて、特に其音に強みを加ふべき事を示すもの。

<i>></i> 又は <i>^</i> 又は ……	…… 特に強く。
<i>sf</i> ……	
<i>fp</i> ……	音頭を強く、 直ちに弱く。

〔設問〕 圓點、横線、連結、及び延長の各形狀及び其効用を問ふ。

〔説示〕 上の設問に於ける諸記號も、また發想記號の一部に屬するものとす。

練習曲

(強弱練習)

- 一. 發想法は即ち、音樂の主腦なる其趣味精神を發揮する方法にして、樂曲がよく其曲意を表現して、吾人に多大の感動を興ふるか、或は單に高低長短を異にせる聲音の無意味なる連續たるに止るかは、主としてこの發想法の適用如何によるものと知るべし。
- 二. 先づ下の強弱練習に於て、聲音弛張の方法に熟して後、之を以下の歌曲に應用すべし。

(下第一線を Do とす)

(1) *p mp mf f mf mp p*

(2) *pp p mf f ff*

ff f mf p pp

強弱練習(つゞき)

(3) *mf*

(4) *p mf p*

(5) *mf f ff f mf p*

(6) *p mf p pp*

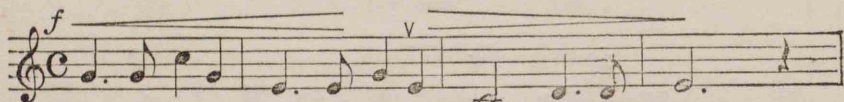
三種の神器

- 一、大八洲國、しろしめす、現つ御神のみしるしと、
祖神の賜はせる、みたからこそはたふとけれ。
- 二、その御鏡のあきらけき、御政事は いと高く、
海の内外に輝きて、ひかり仰がぬ 國もなし。
- 三、その御劍のいやたけき、君が稜威はいと早く、
海の内外に輝きて、みいつ仰がぬ 國もなし。
- 四、その曲玉のまどかなる、我大君の御恩澤は
海の内外にみちくゝて、めぐみ仰がぬ 國もなし。

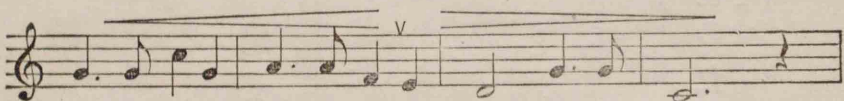
三種の神器

〔設問〕 當曲に於ける強弱記號を説明せよ

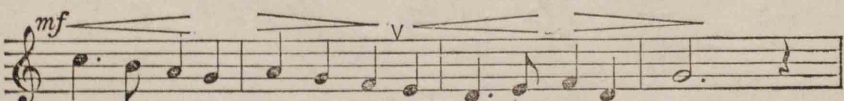
莊嚴に ♩=96. (下第一線を Do とす)



一. オ ホ ヤ シ マ カ ニ シ ロ シ メ ス
 二. ソ の み か が み の あ き ら け け け
 三. ソ の ミ ツ が み ノ イ ヤ タ ケ ナ キ
 四. ソ の ま が た ま の ま ど か な る



ア キ ツ ミ カ ミ ノ ミ シ ル シ ト
 二. み ま つ リ こ と は い と た ヤ か く
 三. ね ま が ほ ほ き み の み と め ぐ み 仰 が ぬ
 四. わ が ほ ほ き み の み と め ぐ み 仰 が ぬ



ミ オ ヤ ノ カ ミ ノ タ マ 一 ハ セ ル
 二. う み の う ち と に か が が 一 や キ テ
 三. う み の う ち と に か が が 一 や キ テ
 四. う み の う ち と に か が が 一 や キ テ



ミ タ カ ラ コ ソ ハ タ フ ト ケ レ
 二. ひ か い ツ あ ふ が め ク ニ も ナ シ
 三. ひ か い ツ あ ふ が め ク ニ も ナ シ
 四. ひ か い ツ あ ふ が め ク ニ も ナ シ

教訓の歌

(設問)一、當曲は何拍子なりや。

二、當曲の最初の小節の拍數不足なるは如何。

靜肅に ♩=100. (下第一間をDoとす)

二、ワザハ一ヒオチキテネニナクガリニコ
 三、のぞみ一はたらひてうれしきおりに

コゾートココロヲトリナホーシテフ
 こぞとこころをひきしめ一つつか

タタビユクテ一ノノゾミーラアーフギ
 なしきむかし一をおもひめぐらしほ

レラーハツヨシトタカクウタヘヨユ
 こりーはあだぞとはやくさけべよ

メユ一メヨチ一ス一テヒトチ一イト一ロ一ツ
 きよ一のため一し一にひきい一ださ一れ一よ

レカーラアガミチホロボスナカレ
 びきりのむらひもなあるもななかり

第十二教 歌曲(教訓の歌)

一〇五

第十二教 歌曲(教訓の歌)

一〇四

教訓の歌

一、 わざはひ落ち来て 音に泣く折に、
 こゝぞと心を 取りなほして、
 再び前途の希望をあふぎ
 われ等は強しと 高く歌へよ、
 ゆめく世を棄て 人を厭ひ、
 われからわが身を 亡ぼすなかれ。

二、 希望は足らひて 嬉しき折に、
 こゝぞと心を ひきしめつゝ、
 かなしき昔を 思ひめぐらし、
 驕慢は仇敵ぞと 早く叫べよ、
 うき世のためしに 引き出だされ、
 世人の笑ひと なることなかれ。

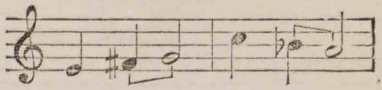
第十三教 變化記號

變化記號 或る音の高度を、其本位より高め又は低め、或は一旦高め若くは低められたる音を、再び其本位に復すべき記號を、變化記號と云ふ。

變化記號の種類 通常用ゐる所の變化記號には、嬰、變及び本位記號シロツラト ナチニラルの三種あり。

- (一) 嬰 或る音の高度を、半音上ぐる場合に用ゐる所の記號を、嬰と名く。其形狀♯此の如し。
- (二) 變 或る音の高度を、半音下ぐる場合に用ゐる所の記號を、變と名く。其形狀♭此の如し。
- (三) 本位記號 一旦嬰若くは變によりて上げ、又は下げられたる音を、再びその元位置に復すべき場合に用ゐる所の記號を、

第二十一圖 (下第一線を Do とす)



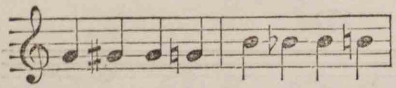
半音 全音 半音 全音

本位記號と名く。其形狀♭此の如し。

變化記號は皆必ず音符の左側に記すものとす。(第二十一圖) [設問] 長音階の音列中に於ける半音の位置を問ふ。

音階に於ける全音と半音との位置は、嬰又は變の記號によりて變換せらるゝものと知るべし。(第二十一圖)

第二十二圖 (下第一線を Do とす)



本位の音 同しく 下音低き音 本位の音 本位の音 同しく 半音高き音 本位の音

或る小節間の音に、一旦嬰若くは變の附けられたる時は、其以下にある同度の諸音も、其小節間に限り、皆之を同一のものと見做すべきものとす。(第二十二圖)

嬰又は變の附けられたる音を、階名にて歌ふ場合には、次圖の如き呼稱に従ふことを得べし。(第二十三圖) (ハラー氏による) 但し本位音と同一の階名を以て呼稱するも妨げなし。

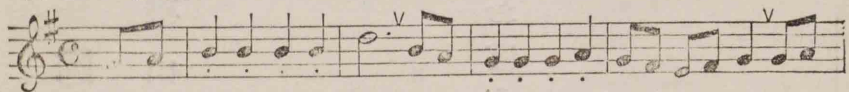
進軍

〔疑問〕一、當曲の三段目、第三小節及び第四小節に於ける全音と半音との位置を問ふ。

二、音符に附記したる小點の名稱並に效用如何。

勇壯に ♩ = 168. (第二線を Do とす)

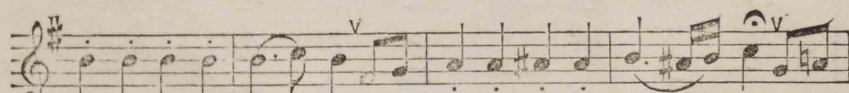
第十三教 歌曲(進軍)



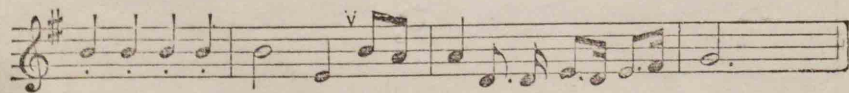
一、イー デュク軍隊 アーシナミソローヘーテシー
二、くーりだす兵隊 せーいせいだうーだーういー



ングンラッバハテーンチニヒービークアー
でゆくさまのいーきはひみーれーばせー



サヒノミハータヒーラヒラフイーテミー
かいにふるーふみーくにのすがーたげー



クニノカゼハチーサトニオーヨープ
にこそみゆれげーにこそみゆれ

一〇九

第二十三問 (上行)

(Do)	Da	Re	Ri	Mi	Fa	Fe	Sol	Sal	La	Le	Si	Do)
(1)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13)
(ヒ)	ト	フ	リ	ミ	メ	ヤ	イ	ツ	ラ	レ	シ	ロ)

(下行)

(Do)	Si	Se	La	Lo	Sol	Sul	Fa	Mi	Me	Re	Ra	Do)
(1)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13)
(ヒ)	ナ	チ	ム	モ	イ	エ	ヨ	ミ	メ	フ	ヘ	ロ)

第十三教 歌曲(進軍)

進軍

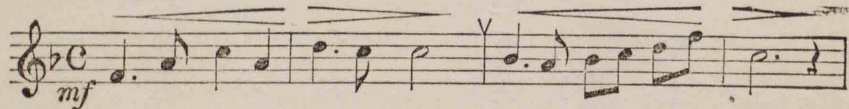
一、出で行く軍隊 歩調そろへて、
進軍喇叭は 天地にひびく、
旭のみはた ひらく吹いて、
皇國の風は 千里に及ぶ。
二、くりだす兵隊 整々堂々、
いでゆくさまの 勢見れば、
世界に振ふ 皇國のすがた、
げにこそ見ゆれ げにこそ見ゆれ。

一〇八

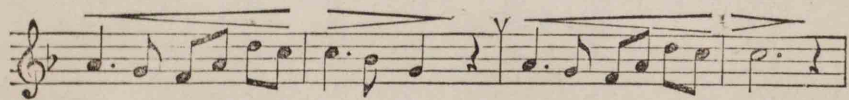
歸 雁

【設問】 當曲第三段の第二小節及び第三小節中の音程を問ふ。

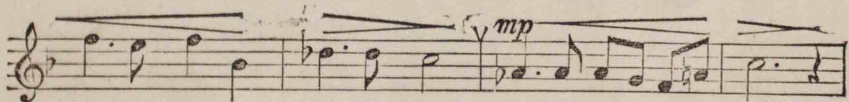
流暢に ♩=88. (第一間をDoとす)



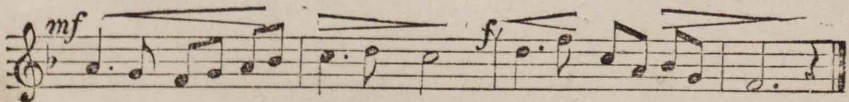
一. イソ ヤマザクラ サキノメーテ
二. おぼろのつきに かげみーせーて



ナミマーデカスム ハルノヨーヤ
わかれーちーをしむ かりがーねーの



トワタリカヘル カリガネーモ
なみよな ぎさよ さらばーとーて



ナゴリーヤイトド フシカーラー
かすみーにーきゆる こゑごーゑーや

歸 雁

一、磯山櫻 さきそめて、

浪まで霞む春の夜や、

とわたり歸るかりがねも、

なごりやいとゞ惜しからむ。

二、おぼろの月に影見せて、

別れ路をしむ雁がねの、

浪よなぎさよさらばとて、

霞に消ゆる聲々や。

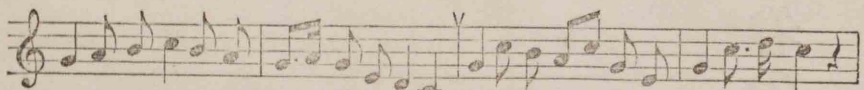
民の務

第十三教 歌曲(民の務)

快活に ♩=116. (下第一線を Do とす)



一. ススメススメ イーザススメ クニノマモリ ロレヒート
 二. すすめすすめ いーざすすめ こゝかのうめい われにあり

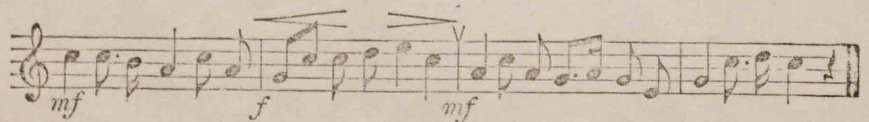


ミユキソラチ ヲーゾムトモ ヒカゲツーチラ ヤクトモ
 こんくほねを つんざくとも いたみは一だを さすとも



ヤタケゴコロ フーリガコシ スシモ オメズ オクセーズ
 やまごころ ふーりおこし せんせつ ばんざ たゆみなく

一一三



キミノミタメクニノタメ ススメスースメ マツシクラ
 きみのみためくーにのため すすめすーすめ まっしぐら

第十三教 歌曲(民の務)

民の務

一、 進め進めいざ進め。 國の守り、われ人、

み雪空を埋むとも、 日影地を焼くとも、

やたけ心振り起し、 少しも怯めず臆せず、

君の御爲國の爲、 進め進め慕地。

二、 進め進めいざ進め、 國家の運命我にあり、

困苦骨を劈くとも、 痛み膚をさすとも、

やまと心振り起し、 千折萬挫たゆみなく、

君の御爲國の爲、 進め進め慕地。

一一三

中等音樂教科書卷の一終

◎ 目概書樂音版出社樂弘 ◎

○北村季晴著(文部省檢定濟) ○音程教則本 (十三年度臨時定價) 送金廿七 料金四錢	○中等音樂教科書(乙種)(同) 卷一 金四十九錢 卷二 金四十七錢 卷三 金四十七錢 卷四 金五十七錢 送料各金四錢	○中等音樂教科書(甲種)(同) 卷一 金七十五錢 卷二 金八十五錢 卷三 金八十五錢 卷四 金壹圓 送料各金四錢	○縮冊ホームマン(卷二) 送料金四十錢 定價金四十錢	○ワアイ 送料金十二錢 定價金十二錢	○北村季晴作 ○敘事唱歌 第一篇 須磨の曲 第二篇 離れ小島 第三篇 露營の夢 各定價金五十錢 送料金四錢	○青柳振作編 ハーマニカ名曲集 送料金五十錢 定價金五十錢	○弘樂社編 ポケット名曲集 送料金三十五錢 定價金四十五錢	○北村邦樂譜 第一篇 吉原雀 送料金八十錢 定價金八十錢
---	---	---	----------------------------------	--------------------------	---	--	--	---------------------------------------

北村季晴作 御伽歌 ドンアラコ 定價 甲種(伴奏附)金一圓八十錢 乙種(唱歌用)金壹圓	同 御伽歌 ビヨコ太郎 定價 甲種(伴奏附)金一圓五十錢 乙種(唱歌用)金四十五錢	同 御伽歌 カクレン坊 定價 甲種(伴奏附)金八十錢 乙種(唱歌用)金二十五錢	同 御伽歌 八形病院 定價 甲種(伴奏附)金八十錢 乙種(唱歌用)金二十五錢	同 御伽歌 ハイ々々息子 定價 甲種(伴奏附)金八十錢 乙種(唱歌用)金二十五錢	東京 共益商社樂器店	東京 山野樂器店	同 十字屋樂器店	大阪 三宅書店	同 三木樂器店	神戸 キド樂器店	京都 十字屋樂器店
--	--	--	---	---	------------	----------	----------	---------	---------	----------	-----------

販販所

明治四十四年十二月十三日印刷
明治四十四年十二月十六日發行
大正三年七月二十日訂正參版
大正十三年五月五日二十版發行

不許複製

甲一
定價金七拾錢

編者 東京市外下目黒四二六
北村季晴

發行者兼 弘樂社出版部

印刷者 代表者 佐藤辰巳

東京市京橋區南金六町十二

印刷所 英文通信社印刷所

東京市外下目黒四二二

發行所 弘樂社

(振替東京 四五九五九
電話高輪 一四三七)

廣島市堀川町本通

販賣所 花坪樂器店



1979.6.24

文庫

0

924

8327

広島大学図書

0130458327

